一九六〇年安保闘争を主導した政治組織・共産主義者同盟(第一次ブント)は、東京での激しい分派闘争を経て六〇年末には分解し果て、多くの幹部は革共同全国委員会に参じていった。翌六一年から六二年にかけて、ブントの下部活動家であった学生たちを中心に東京社学同が再建される。挫折ムードが蔓延し「ぺんぺん草も生えない」ようなキャンパスに再度学生の大衆運動を根づかせようと、大管法から日韓にいたる諸闘争を彼等は懸命に担っていったが、その内部ではマル戦派、ML派、独立派などの分岐と対立を抱え込まざるをえなかった。一方、関西では京都府学連を中心にブント系の運動は堅固に保持されていた。

一九六五年、東京の旧ML派・独立派・諸労働者グループなどと関西共産主義者同盟(関西ブント)は合同して共産同統一委員会(機関紙『先駆』)を結成する。ここに共産同大合同の気運はようやく熱し、統一委と共産同マル戦派(機関紙『黎明』)は組織統一を確認、六六年九月にブント統一再建第六回大会」が開催された。第二次ブントの結成である。

インタビュー特集
第二次ブント三〇年

多彩な個性を花開かせた第二次ブントは折から急速に高揚しはじめた学園闘争と反戦闘争の先頭で奮闘し、七〇年安保決戦までの激闘の日々を一気に駆け抜けた。第二次ブントは一九七〇年には最終的に四分五裂し、内訌と訣れの時代が到来する。第二次ブントは大きな可能性を秘めながらも、さまざまな点でまだ余りにも未熟な政治組織であった。

今年は第二次ブントの結成から、ちょうど三〇年目にあたる。本号では、第二次ブントの経験から改めて汲み取るべきものを探るために、往事の思い出について三氏に語っていただいた。快くインタビューに応じていただいた三氏には、あつくお礼を申し上げる。それにしても……第二次ブントの政治局員であった石井暎暗(正木真人)氏がかつて党員の数だけのブント史があると記されたごとく、第二次ブントほど「唯一の・公認の、党史」というものが似合わない組織があるだろうか、という感慨をわれわれは否めない。(編集部)

『共産主義』八号(一九六六年一〇月)

統一再建六回大会の呼びかけ

プロレタリア永続革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ!

共産主義者同盟政治局

全国の同志諸君!
戦闘的労働者学生諸君!

共産主義者同盟統一再建第六回大会において、われわれは、プロレタリア日本革命およびプロレタリア世界革命の戦略戦術について革命的一致に到達した。

この一致は、次のスローガンに要約される。

「反帝闘争をプロレタリア日本革命へ!
日本革命をアジア革命の勝利と世界革命の突破口とせよ!」

これこそ、現代世界のプロレタリア永続革命の旗印しにほかならない。

(一)

「永続革命」は、フランス大革命におけるジャコバン党の革命的旗印しであった。

この旗印しの下、サンキュロット=パリの下層人民大衆は、国内反革命に鉄槌を下し、外国反革命軍を粉砕し、有産者どもを恐怖のどん底に叩きこんだ。

「臨時革命権力=公安委員会独裁の『永続』か、
革命権力の国民議会への移譲か」

このような形で「永続革命」は、フランス大革命の頂点において初めて歴史的に問題となったのであった。

一八四八年革命の真最中、再びまた、永続革命は、マルクス・エンゲルスと「共産主義者同盟」により、プロレタリアヨーロッパ革命の旗印として高々と揚げられた。「ブルジョワ革命のプロレタリア革命への永続、転化」または「小ブルジョワ民主主義者の反政府闘争のプロレタリア革命への永続と、それのヨーロッパ革命への拡大」。これこそ、**マルクスの永続革命**であった。

だが、マルクス・エンゲルス死後、このプロレタリア永続革命の旗印しは、第二インターナショナルの日和見的指導者どもによって、忘却のかなたに葬られた。

一九〇五年、一九一七年のロシア革命において、レーニン・トロッキーは、このプロレタリア永続革命を、プロレタリア世界革命の旗印として革命的に復活させた。

レーニンは、切迫する帝国主義世界戦争とそのひきおこす世界的危機をプロレタリア革命に転化するという戦略=**「帝国主義戦争を内乱へ!」**を明示した。

さらに第一次大戦の最中の一九一六年、チンメルワルドに結集した第二インター内左派の会議において、反戦闘争を平和のための手段としてしか位置付けず、「帝国主義戦争を内乱へ!」という戦略を空念仏化させていた第二インター右派の主流に対して、レーニンは、反戦闘争は、プロレタリア革命への前段階的闘争たりうるのみである点を鋭く対置させた。

反戦闘争をプロレタリア革命へか、反戦闘争を平和へ!、か

これこそが、第一次大戦前夜とその最中における革命指導部と改良主義指導部の方針上の根本的対決点であった。レーニンのプロレタリア永続革命とは反戦闘争のプロレタリア革命への転化・永続とその世界革命への波及にほかならない。

だが、レーニン死後、この革命的旗印しは、コミンテルン指導部スターリン官僚どもによって、再び投げすてられた。

一九三〇年代初頭の危機によって、ドイツのブルジョワ既成指導部と、プロレタリア既成指導部＝社会民主党はともに破綻しそれをとおしてナチス反革命かプロレアリア社会主義革命かの決戦が問われた。

「反ファシズム闘争を、プロレタリア革命へ！」――これこそが、ドイツにおける革命の戦略戦術方針であった。だが、コミンテルン指導部は反ファシズム闘争をプロレタリア革命への過渡的闘争として位置付けそれに全力を注ぐのではなく、逆に、右に屈服していく社会民主党指導部を遠くから野次るだけで、プロレタリア大衆をナチス反革命のえじきとさせたのであった。

「反ファシズム闘争をプロレタリア革命へ！」か

「反ファシズム闘争を民主主義政府へ！」か、すなわち反ファシズム闘争を、「反ファッショ民主主義政府」のための闘争として絶対化するか、それとも、反ファッショ闘争をプロレタリア社会主義革命に**永続する過渡的闘争**として位置付けるか、ここにこそ革命指導部と社会民主主義指導部との根本的対決点がなければならない。だがナチス反革命の勝利によって総敗走におちいったコミンテルン指導部はプロレタリア革命を空文句として叫ぶ気力をも喪失し「反ファシズム闘争を、反ファッショ民主主義政府へ！」とする社会民主主義に屈服してその尻押し部隊＝ブルジョワ民主主義と民主主義政府の讃美者に転落し、ここに、プロレタリア永続革命は、忘却の彼方に捨てさられたのである。

それだけはない。第二次世界大戦直後の世界的な革命的危機に対し、コミンテルン系共産党は、生活防衛闘争を、資本主義の民主主義的再建闘争にすりかえ、それによって、プロレタリア革命を内部から裏切ったのである。**「生活防衛闘争をプロレタリア革命へ！」か、「生活防衛闘争を民主的再建へ」か**。革命的コースと社民的コースの対決点は、まさに右の点にあった。だが、しかし、イタリー、フランス、日本において共産党指導部は、社民コース＝資本主義の民主的再建の走狗となりはてたのである。

全国の同志諸君！戦闘的労働者学生諸君！

今こそ、世界資本主義の動揺と迫りくる世界危機を前にして、われわれは四たび(ジャコバン党・マルクス・エンゲルス・そしてレーニン・トロツキーに次いで四たび)高々と掲げる。このプロレタリア永続革命の旗印し、プロレタリアジャコバン主義の鮮血の旗印しを。

（二）

今や、アメリカを中心とした資本主義の戦後体制は巨大な動揺を開始しつつあり、これによって帝国主義諸国の対立は激化しつつある。帝国主義対立の主戦場は、先進国間市場の分割戦であり、それゆえ各国資本の主要戦闘方法は、相互ダンピング戦とならざるをえない。各国資本は、このダンピング戦の負担と犠牲を、財政収奪や賃金抑圧、合理化等をとおして、帝国主義諸国の国内人民大衆に転化せざるをえない。

原料、燃料、食糧を自己の勢力圏内に持たず、国際金融体制の弱体な日本帝国主義はとりわけその方向に追い込まれている。

こうして、日本帝国主義の政治的経済的攻撃がはじまった。いまや日本帝国主義はその国内攻撃に自らの生存をかけている。それゆえに、この攻撃に対するプロレタリア人民大衆の抵抗闘争＝反帝闘争は、すでに帝国主義打倒の要求を内部に秘めているのであり、プロレタリア革命への前段階的闘争以外の何物でもない。

「反帝闘争をプロレタリア革命へ！」――これこそ帝国主義諸国内のプロレタリアートが闘いとるべき永続革命である。

「反帝闘争をプロレタリア日本革命へ！
日本革命をアジア革命の勝利と
世界革命の突破口とせよ！」

これこそ、現代日本のプロレタリアートが闘いとるべき永続革命である。ところで、現在、反帝闘争のスローガンは日本の全ての左翼勢力によって掲げられている。

だが社会党の反帝闘争は、「反独占の社会党議会政府」のための手段でしかない。日本共産党の反帝闘争も、「反米帝・反独占・中立の民主連合政府」のための手段でしかない。いずれにおいても、既成指導部の反帝闘争は民主主義議会政府のための手段でしかない。

「反帝闘争を、民主主義議会政府へ！」か、反帝闘争を、プロレタリア日本革命へ！か「まさに、われわれと社民の日共との根本的相違は反帝闘争を、プロレタリア革命に**永続する**前段階的闘争として位置付けるか、それとも、民主主義議会政府のための闘争として位置付けるか、この点にある。

これに対して、共産主義左翼諸派はどうか。社革新の「反独占社会主義」、社青同解放派の「反帝主義」、革共同の「反帝反スターリン主義」等は、いずれも運動の最終目的を抽象的に表現する原則スローガンの域を出るものではない。

このことは、これら共産主義左翼諸派・諸グループが、プロレタリア日本革命への戦略的展望と戦術方針によって武装されておらず左翼活動家集団にとどまっていることの端的な表現である。それゆえプロレタリア日本革命への戦略戦術によって武装されたわれわれこそが、左翼活動家集団をけん引し指導する党的中核としての地位にいる。

（三）

日本帝国主義の国内攻撃は、従来の取り引き的階級闘争の指導部＝社民左派を行き詰まらせ、まず第一にここに

動揺をひきおこしている。国内攻撃に対する徹底抗戦か、または議会主義的組合主義的社民右翼路線への全面屈服かを迫られて、社民左派(社会主義協会)は、動揺し、それによって社会党下部活動家の間に流動と動揺を引きおこしている。社青同中央・社会主義協会の社青同東京地本(解放派)の解散としめつけはその最も鋭い表現である。これは、社青同解放派の小型オプロイテ化(独立グループ化)の端緒とならざるをえないであろう。また同様の運命は、社会主義協会自身にも早晩おとずれるであろう。

労働運動基幹部隊のプロレタリア大衆を結集するには、このような労働運動独立グループと左翼諸派を左翼統一戦線に結集しその下に大衆をひきつけるという統一戦線戦術以外にはありえない。

労働運動基幹部隊における動揺と流動化は、われわれのプロレタリア結集政策＝われわれが党的指導部として左翼活動家集団を結集し、その闘争力の下にプロレタリア大衆をひきつけるという結集政策をいまや現実の日程にのぼせている。

このことは、共産主義左翼諸派を、単一のプロレタリア革命党に結集することが、同時に、日程にのぼっていることを、いみしている。

日本におけるプロレタリア革命党の組織は、われわれを党的中核として、現にある共産主義左翼諸派及び労働運動独立グループを集中し結集する以外にはない。

日共の組織戦術の決定的限界は、プロレタリア既成指導部の動揺に介入しうる絶好の地位におり、それを可能にする物質力をもっていながらも、相も変わらぬ倍増運動にたよっているだけで、既成指導部の流動に介入するという視点を完全に欠いている点にある。

革共同も反帝反スターリン主義者の培養というのが、党建設の唯一の組織方向になっているだけであり、現にある共産主義左翼諸派の配置、独立グループの配置を前提として、いかにして全体をプロレタリア革命党に組織していくのかという具体的展望は全くない。

プロレタリア日本革命への戦略戦術によって武装されてこそ始めて、革命党を準備し組織する党組織戦術も具体化しうるのである。

(四)

全国の同志諸君！戦闘的労働者学生諸君！

われわれは、ベトナム秋闘の闘いの先頭にたつことによって、新たな前進を開始するであろう。

日本階級闘争の前衛部隊＝共産主義者同盟を先頭に、新たな前進を開始せよ！

「反帝闘争をプロレタリア日本革命へ！

日本革命をアジア革命の勝利と世界革命の突破口とせよ！」

「反帝闘争の旗の下、

侵略と抑圧に抗し、生活と権利を実力防衛せよ！」

「プロレタリア永続革命の旗の下、

共産主義者同盟に結集せよ！」

第二次ブント三〇年

世界赤軍が夢だった

塩見　孝也

――第二次ブントというと、関西ブントの存在を抜きには語れませんけども、塩見さん自身はいつから活動を始めたんですか。

●一九六二年に京大(文学部)に入ってすぐだよ。京大生協のアルバイトに応募して採用されたら、そこが社学同の拠点だった。憲法が改悪されて侵略戦争がもう一回やられる、憲法改悪阻止闘争に決起せいと言われた。

自民党の憲法調査会が各地で公聴会をやっていて、それに反対するために広島に四月の半ばに行ってデモしたら、そこで逮捕されちゃった。一日ぐらいで出されて、四・二八闘争のデモとかメーデーにも行った。すごく勢いがあって、うれしかった。そういう感じで、浦野氏が毎日毎日下宿にオルグに来て、すぐ社学同に入った。

――関西共産主義者同盟の結成が六二年の春ですから、活動家としての塩見さんの歴史とぴったり重なるわけですね。ブントに加盟するのはいつですか。

●六二年の大学管理法闘争のあとかな。池田内閣が大管法を出してきた当時、東京の学生運動は分裂状況だったけど、関西はまるまるブント関西地方委員会が関西共産主義者同盟という形で、例の政治過程論を結集点にして残っていた。京大、同志社、大阪市大を軸にして学生運動にも勢いがあった。それで関西ブントが音頭をとって

大管法闘争を全国化しようということで、僕は京大教養部の闘争委員長になって、大管法闘争を一年間やった。

結局大管法は国会に出さないということになったけど、京大では全学闘争委員会を作って、同学会と教養部の自治会がそこに権限を委託してやるという、のちの全共闘方式で大学封鎖までやった。その結果、全学の闘争委員長だった新開氏と教養部の委員長だった僕が処分された。それでブントに入った。

関西ブントによるブント統一の試み

――大管法闘争を契機にして、関西ブントはいわゆる上京組による東京でのブント再建運動に着手するわけですが、その話に入る前に当時の関西ブントの理論的結集軸についてうかがいたいと思います。たしかその頃は政治過程論でしたね。

● 政治過程論やね。政治過程論はレーニンの批判した「過程としての党」とかいう言い方でもよいけど、革マル的な『プロレタリア的人間の論理』なるものによる共産主義者の武装だとか、主体性哲学を学ばなければいかんとか、ブントは小ブル急進主義だというような批判に対して、小ブル急進主義かどうかは知らないけどブントは客観的には権力と闘って運動全体を牽引し指導していったということが大切なんだ。その点に着目して、六〇年安保闘争を大衆闘争の推進、それを指導する党という観点から総括した一つの政治思想、それが政治過程論だと思う。それが次の第三期論に時代評価としてはつながっていく。

――第三期論というのは誰が、どういう問題意識で出されたんでしょうか。

● 同志社大学の田中正治氏が骨組みを展開したんだが、日韓闘争の前後から第三期が始まったという考え方。何故第三期かと言ったら、日本帝国主義が復活して、日韓条約を結んで侵略していく、海外に膨張していく。だから今までのように平和と民主主義、あるいは市民的統一戦線を左から運動的に引っ張っていくというようなことではだめなんだ。反帝国主義で意志統一した反帝統一戦線をつくらんとあかんという結論になる。

当時の運動構造でみると、社共があって総評、原水禁・原水協があり、全学連が左の戦後民主主義の中核をつくっていた。だけど日本資本主義が膨張すれば労働運動は変質するし、小市民的な平和運動では帝国主義の侵略とたたかえない。こういう戦後政治の構造分析をやって、反帝統一戦線から反帝全学連をつくろうと考えたんだ。

――第一期、第二期というのは何をさしてるんですか。

● 第一期は戦後、第二期が五五年頃から日韓ごろまでの六〇年安保前後、相対的安定期という。第三期が反帝の時代で、同時にプレ・ファシズム、ファシズム前期の時代だと捉えた。

当時東大ではブント系では佐竹氏と

服部(信治＝水沢史郎)氏ががんばっていたんだけど、経済学部自治会の委員長だった佐竹氏はレーニン帝国主義論にもとづいて、経済分析から日本が帝国主義化する、だから階級決戦だという。ものすごく単純なわけだ。で、服部氏は第一次ブントが崩壊する頃に革通派だけど、池田内閣の所得倍増から危機が来るから決戦だと言っていた。

そういう決戦論が日韓条約が結ばれた六五年頃までに破産して、経済分析から運動を演繹するような見方じゃなくて、主体の運動論から陣形を考えながら進めなきゃいかんという関西ブントの主張、それが第三期論になる。これが影響を与えてブント統一委員会ができていく。

――統一ブントができるのは六五年の七月ですが、それ以前に関西ブントは何度かブント再建の試みを行っていますよね。

● 大管法闘争の頃から全国化せなあかんということで、僕もくっついて行ったわけだが、新開氏、田中氏が東京に出て中大の味岡氏が協力する形で社学同を再建したりするんだが、その頃の関西ブントはまだ腰がすわってなくて、半年ほど東京にいてひきあげちゃうという形だった。それで味岡氏は嫌気さして統一委員会には加わろうとしないんだが、六四年にもっと本格的にやらなあかんということで、佐藤浩一(飛鳥浩次郎)さんが大学生協連の事務員として東京に出る。それに浦野氏と渥美氏が加わって労働運動と機関紙をつくり、学生の方からは僕と八木という陣容だった。ブント再建と全学連再建を同時にやろうということだった。

その当時東京のブントは六三年の一〇月に、服部派＝マル戦派(マルクス主義戦線派)と佐竹派＝ML派(マルクス・レーニン主義派)に割れている。しかしMLの中で佐竹氏の階級決戦論ナンセンスという批判がよっちゃん(高橋良彦＝松本礼二)とか石井氏、黒岩氏らから出てきて、彼らがMLの主流になる。彼らと、独立ブントの古賀、中大の味岡氏が加わり、それと関西ブントが一緒になって統一委員会ができるわけだ。その時仏(さらぎ徳二)さんも加わっている。

もともとは六四、五年に関西ブントの音頭取りで始めた全学連再建がすぐには成功せず、都学連をまずつくる。そのころ社青同解放派と関西ブントは、仲良くて、山本(三島)氏が委員長になる。それで都学連主催という構造で日韓闘争やる。ブント統一委員会を作って都学連を土台にしながら全学連をつくろうという方向だった。

マル戦はマル戦で岩田弘の世界資本主義論を展開しながら日韓闘争をやって、日韓闘争が終わったら合流しようと、僕はマル戦派の諸君と話をしながらやっていた。

――そのころのブントの拠点大学というと、例えば。

● 明治、中大、専修、東大、医科歯科とか医学連は黒岩、石井、斉藤などの各氏がいてブントの掌握下にあった。関西はもうバチッとあったし、母胎からいったら圧倒的に学生運動の主流派

だった。ただ、図体は大きいけど、指導部は「八個連隊」とか言われたようにごちゃごちゃしててまとまりがなかった。

だけど日韓闘争で下の方からは大学派閥主義をこえる若い活動家がだんだん育ってくる。上の方は八個連隊とか言われているけど、下はブントを名乗る者は一緒にやろうという形でまとまっていく。学生運動では僕が引っ張りながら、マル戦派の石田氏とか成島道官氏、山崎氏などの大管法世代と意気投合していた。それで日韓闘争の後の六六年九月にブントを再建する。それが六回大会だね。

――統一委員会の学生は、ほかにはどういう人たちがいたんですか。

●専修の中井、中大の高橋、川口、味岡。彼らのまわりに足立、蛭間、中沢の各氏、みんな関西ブントファンだった。東大では斉藤ヨシオ氏、古賀氏。それから明治では斉藤克彦氏、医科歯科ではもうちょっと下だけど岡野氏とか山下氏などだ。

あと、最初に僕が六四年ごろ上京して都学連が生まれたころ、早稲田の村田と菅野、野本、花園など雄弁会左派を自称していた四、五人が、関西ブントのファンになって、組織作ってくださいと指導をもとめてきた。これは直接に関西ブントを慕ってきたわけで、東京のブント系とは関係ない。

――早稲田を足がかりにして東京に関西ブントの拠点を作ろうとしたということではないんですか。

●東京に関西ブント系を作ろうとかは、あんまり意識してなかった。慕ってきたから話してたら自然にそうなっただけのことで、翌年だよ、荒や佐脇をオルグしてブント早大支部ができるのは。

当時の直接の問題意識は七〇年安保闘争を闘うための全学連を作ることが何よりも第一で、そのためにはまずブントをまとめなきゃいかんという意識だよ。党を作って活動家を育てるとかより、学生運動の全体を何とかまとめようという観点だった。そういう意味では早稲田は異色だったし、こっちもおもしろいということはあったけどね。

全学連再建とゲバラへの思い

――全学連再建は六回大会後の一二月にいわゆる三派全学連（ブント、中核派、反帝学評）として再建されるわけですが、六回大会では塩見さんはどんな役回りで？

●僕は一番最年少の政治局員で学対部長だった。石田氏が社学同委員長で、中井氏が社学同の書記長かな。で、成島道官氏が政治局ではないけども僕のサブとして参加し、二人が組んで学生運動を指導するという構造だった。道官氏と僕で全学連再建をブントで指導した時、まず最初に明大闘争があった。ところが斉藤が裏切るということの中で危機に落ち込む。よっちゃんなんかは裏のボス交政治みたいのが最高に好きな男だけど、古賀、石井、廣松の各氏も一枚かんで、裏で全然別途な

明大闘争の政治をやり、斉藤・大内がそれに従い、学対とは全然別個に動く。

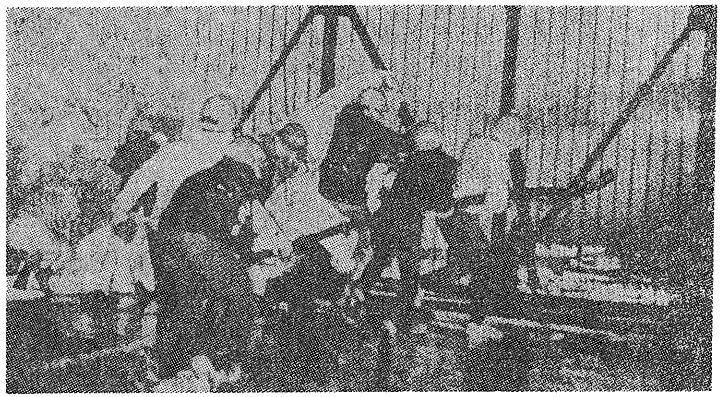
僕は学対部長で、成忠氏や中井氏と一緒に明治にはりついているんだけど、ぜんぜん知らないとこで政治が動いていた。その結果、二・二協定が結ばれてしまい、中核はこの時とばかりに全学連委員長をよこせという話になる。しゃあないから、全学連委員長を秋山氏に譲って、成島（忠夫）氏を副委員長に立てた。

一方で、すでに六回大会の頃から軋みが起こっている。マル戦系が機関を牛耳って、統一ブント系は大きな勢力を持っているけど、機関の力はないという構造になった。マル戦は生活と権利の実力防衛で決戦論だけど、これは一種の経済主義で平和と民主主義の延長ではないかと各派から批判が出る。統一ブントはそういうマル戦みたいなシェーマチックな論理、やや合理主義の軽い体質は、あんまり受け付けない。経済決定論的ではなく、思想は混沌だが重く、運動主体というか、主体の形成と権力との関係という政治過程論からの発想がある。

第一次ブントの分解時の例でいえば、革通が経済決定論で、戦旗が哲学主義だとしたら、島成郎氏を含んだ主流派のプロ通はいわば運動論で、これが政治過程論として関西に継承されたといえる。政治過程論はあんまり論理化されたり哲学化されたり、思想化されたりしていないけど、唯物論的党派性もあり、結構バランスをもっていた。だからマル戦みたいに、単純な岩田弘氏のＩＭＦ体制が崩壊して危機が来る、危機が来たら決戦だというような論理はすごく客観主義に見えて話にならん。

いずれにせよ、明大闘争で論争が表面化していく。しかし、僕は目標にしていた全学連の再建はやったし、明大闘争は何で負けたか考えないといけない、やっぱり労働運動やらなあかんと思って、いったん関西にひきあげる。

――政治過程論は経済決定論の客観主義に対して、主体と客体の攻防を問題にしていたということですけど、主体の側の団結や共同性をどう作り上げていくのかがちょっとみえてきませんが。



1969.10.21防衛庁闘争　正面ゲートから突入する社学同

●そのへんは僕の個人的な営為でやってるところもあったわけだが、大衆の利益、運動の推進が基準になっていたと思う。明大闘争は鋭い闘争であった。初めてゲバ棒もって右翼と渡り合うし、思想的な問題が問われる。何で革命をやるのかと。

僕なんかはその時に、経済学をちゃんと勉強せなあかん、資本主義が何で悪くて、何で労働者革命やるのか、そういう労働者の世界観を問題にした。少なくとも宇野経済学じゃそういう状況に耐えられないとか、黒田氏の疎外論みたいのはだめだという問題意識があって、労働者のところに行きながらその質を学ぼうと考えた。学生運動をずっとやってきて、第三期論で全学連再建、ブント再建までいって、それからという時に、明大闘争は一つの思想的な問題を出してきた。もっと体系的で全体的な思想的・理論的体系を獲得しないと進めないという状況だった。それで僕は退く。

——それはいつ頃ですか。

●六七年の三月。それで一二月頃まで関西にいて、地区反戦とか労働運動をやりながら、基本的には岩田資本主義論を批判しようと経済学の勉強をやった。じっくり労働運動やって、しっかり『資本論』なんかを勉強して思想的哲学的に問題を解決していこうと思ってたんだ。だけど、各派とも砂川から安保決戦へという動きになってきて、一〇・八羽田とかあって安保闘争の方針をどうするんだという話になる。関西ブントの中でも前段階決戦論を僕が書いたりする。

——前段階決戦というのは誰が言い始めたんですか。

●僕が言ったと思う。マル戦の日本革命をアジア革命へ、アジア革命を世界革命へという三段階ロケット論、ああいう段階論はだめだ、世界同時革命だというのは中島氏なんかが言ってたんだけど。そういう主張でマル戦と別途な革命論を関西ブントは展開する。

その頃チェ・ゲバラの影響や、カストロへの興味もあったし、文革も拡大していく。それで「世界革命の第三の道」と言って、チェ・ゲバラやカストロと連帯して世界革命をやる、ベトナムと連帯し、日本は侵略戦争の前段で革命やっていけるようにするという主張が前段階決戦論だ。日帝の侵略反革命とたたかって前段階決戦をやることでベトナムと連帯しようという文章を書いた。

——「ゲバラ・カストロ路線とわれわれ」ですね。

●中島氏の世界同時革命は『ドイツ・イデオロギー』から導入した論理なんだけど、僕は当時の世界的な情勢から、特にゲバラなんかに思い入れしながら提出した。それらが総合されて、対マル戦という関係の中で、いわゆる過渡期世界論としてまとまっていく。

ともあれそういう文章を書きながら、関西はまとまっていく。で、今度は三回目じゃないか。一回目は自然発生的に六三、四年頃全学連づくりに東京に出かけていった。二回目は飛鳥浩次郎氏以下かなり組織だってやったけど全体重をかけてやったわけじゃない。今度は組織だって、全体重をかけてやろう——これは僕の政治的な総括でもある——、ということもあって、その理論的な支柱に「ゲバラ・カストロ路線とわれわれ」という政治論文が一つの結集軸になっていった。

一向過渡期世界論の定立

——塩見さんのその論文が、中島さんの同時革命論とも合わさって、いわゆる一向過渡期世界論としてまとめられていくと考えていいんですか。

●それはこうなんや。七回大会は六八年の三月でしょ。六七年の年末頃から僕は東京に詰めて、関西が中心だけど全国を飛び回っていた。東京には渥美氏、浦野氏がいて、関西は新開氏、佐野氏、旭凡太郎氏、それに学対では高原とか田宮とかいたけど、そういうのをつなぎながら動けるのは僕ぐらいしかいなかった。

そうするといろんな問題がだんだん僕のところに集中してくる。それを整理しようということで、それが世界革命序論という形でまとめられていく。いわゆる過渡期世界論、あとから一向過渡期世界論というふうに限定されてったのかどうか知らんけど、そうなる。三ブロック(帝国主義国、「労働者国家」、後進国)は同時に革命を起こさんとあかん、日本は社会主義革命の前段階決戦だというような内容になる。高原は「国際主義と組織された暴力」という形で書いてるけど、だいたいそういう形でまとまっていく。

過渡期世界論は客観情勢にはフィットしてるし、ベトナム、文革も、チェコの問題もあった。ソ連の反動性とか、キューバだったらゲバラ、アメリカならブラックパンサーとかが出てくる。

——そのへんが三ブロック階級闘争という発想の基盤になっている。

●そうだね。客観的な情勢を反スタ論ではなくて、民族解放闘争の革命性というのを一つの土台にし、あるいは毛沢東思想なんかをスターリニストという形で見るんじゃなくて、アジアの共産主義の独自性というふうに見ていく観点とか。ゲバラ、カストロは中ソとは違う体質というようなことも含めて、総合的に説明できる情勢分析をめざした。それをまとめ上げたのが三ブロック同時革命論であり、世界党—世界反帝統一戦線論だった。マル戦の三段階ロケット論なんか問題外にするように事態を対象化していた。だから勢いが違っていた。

また革マルや中核の場合には左翼スターリン主義批判ということで、要するに米ソ代理戦争論みたいなものをまだ脱却していない。中核派だって相当後になって民族解放革命戦争とかの規定をやるわけで、世界を対象化する能力というのはほとんどないわけや。本多延嘉氏なんかも過渡期世界論を見て一〇・八、一〇・二一の総括をしている節が見受けられる。清水丈夫氏の内

乱内戦論も明らかに前段階決戦論の図式で見てるわけだよ。ともあれ僕としては哲学上、思想上の問題を問題意識に持ちながらも、情勢におわれてそれは間にあわないままカッコに入れて、ないし藤本進治氏とかで補完しながら政治情勢分析で進んでいってる。それが第七回大会だよ。

——藤本進治氏のどういうところに塩見さんとしては注目したんですか。

●「プロレタリアは私的所有と生産の社会性の自己矛盾を掲げた存在」といって、プロレタリアートが産業資本主義から帝国主義へと、その私有制と社会性の矛盾を展開しながら歴史的に階級形成されていく構造が展開されている。資本主義を批判しながら、労働者は階級として階級形成していくということが、精密ではないけれども展開されている。僕にはそれが最初資本主義批判なり、労働者が何で革命やるのかということとして、感覚的にしっくり合ってたんだ。マルクスに表現されて、最後はレーニンに表現されていくとか、国際共産主義運動を労働者階級の自己形成論みたいな構造で展開しているような内容がね。

もちろん藤本進治氏の場合ヘーゲル主義だとか、なんで労働者階級が自然発生的に自動的に階級に形成されていくのかという問題は残る。主体の側からみたら、資本主義を批判しながら主体がどう形成していくのかという問題は抜けている。だからぜんぜん満足はしてなかったんだけど、そういう構造の中で、そこに解答を見出す余裕のないまま、そういう世界観とか哲学を留保したまま第七回大会を迎えていく。

——七回大会で何故マル戦派が出たのか、あるいは出されたのか。

●いろんな動きがあったのか知らんけど、基本的にはマル戦派は出ないで、書記長は服部氏、あと中央委員会の数も彼らの勢力に比例する分を空けといたわけだよ。機関を彼らが独占している状況があるし、生活と権利の実力防衛じゃあかん、世界同時革命でいくけど、書記長はマル戦でいいんちゃうかという考えだよ。

マル戦派を叩き出すということより、自分たちの主張や路線を防衛していこうということだったけど、彼らが来なかったわけよ、二日目に。あれはマル戦派ぜんぜん根性ないというのか、ナンセンスに対応したということだよね。

防衛庁闘争を巡って路線対立

——その七回大会で、過渡期世界論、世界同時革命論がブントのいわば綱領的内容とされていくわけですよね。

●これからまたまたおもしろくなっていくんだ。七回大会が始まる前後から、次の体制をどう担うかという内部の緊張が生まれる。統一した基準を持ってマル戦派を批判していたわけじゃないわけだから、そういう緊張生まれるのは当然だけど、大枠としては

佐野さんを議長にして関西ブントが中心になりながらつくっていこうということだった。六〇年代のブント統一の試みとか運動のヘゲモニーを持っていた、いわば真打ちとしての関西ブントが前面に出ることはみんな認めてたと思う。佐野さんを中心にしていこうとね。だけど理論内容からみたら、みんなが共通基準として持ってたのは過渡期世界論だな。それが議案としてできる。

——塩見さんは議案づくりには。

●議案づくりは組織だってやってないんじゃないかな。

——『共産主義』の一一号が、決定報告集として出されていますが。

●あれは岡野氏が書いているはずだよ、たぶん。

政治局というのはよっちゃんとか佐野氏、黒岩氏、渥美氏など僕より一つ上の世代がやってたから、その連中が議案つくったんちゃうかな。だけどそれは組織討論の対象になってないはずだよ。その前に僕が『解放』という中大細胞の機関誌で過渡期世界論を出して、関西地方委の『蜂火』に載せて、下敷きが出来て、それをたぶん政治局の方で書いたんかもわからんけどな。

——塩見さんは再び学対にもどったんですか。

●いや今度はね、大衆運動部長というのを仰せつかったんだ。今でいえば企画部長みたいなもんかな。学対は高原、労対は旭氏。で僕は大衆運動部長。それから斉藤ヨシオ氏が政治局兼東京都委員会、中井氏も政治局員。学対はあと村田とか山下とか、中井氏は労働運動に回った。田宮なんかは地区党だよ。関西から来た連中はほとんど地区党に入った。荒は学対の一メンバーで、社学同の役職になってたかな。

僕に対しては過渡期世界論を出したとか、いろんなみんなの期待がある。だけど別に組織の指導権を確保するなんて意識は全然ないわけだ。そういうことは上で佐野氏とかよっちゃん、仏氏、渥美氏とかがちゃんとやってくれるという認識だよ。だから大衆運動部長ぐらいでええやないかという。

——具体的には大衆運動部長ってどういうことをやるんですか。

●そんなの僕もわからんよ(笑)。

——六八年は一方で東大闘争とか学園闘争が全国で巻き起こっていきますよね。そして一〇・二一の防衛庁闘争をめぐって、ブントの中で論争があったりする。

●その頃、第七回大会以降、味岡氏もブントに入り、よっちゃんが中大にくっつこうとする、仏氏は専修にくっついて仏流の政治を行おうとする。斉藤ヨシオ氏は仏氏の傾向と違うんだけど、仏氏と組んでいくという形になる。なんでそうなっていったかというと、塩見・佐野・旭の下に医科歯科のグループ、早稲田とか明治、中大の若手グループ、こういうのが主流派的にガァーっと登場する。

日韓、砂川、一〇・八、羽田、あるいは授業料闘争をずっと闘ってきた活動家がたくさん出てくる。この勢力は

大学派閥主義とか、第一次ブントの系列とかあんまり関係ない。八個連隊なんかと関係ない世代なわけだよ。そこに僕なんかは立脚している形とるわけよ。

だから大衆運動部長みたいのはわけわからんことだけど、方針とかいうことになると結局僕が出さざるを得ない。防衛庁闘争とかさ。そうすると佐野氏を担いでいるわけだけど、こっちも主流派フラクションみたいな――みんなフラクションつくっちゃうわけだから――ものを作るというかたちになる。

八・三国際反戦会議のころまではまだ問題は表面化してないんだけど、防衛庁闘争、一〇・二一で爆発していく。一〇・二一闘争で、僕は前段階決戦の開始だから、火炎ビンから含んで防衛庁闘争やらんとあかんと、主流派はみんなそう思っているわけよ。

ところが、それに反発する勢力が生まれる、仏氏の勢力みたいに。で、僕ら上京組と新しい新生世代、それに渥美氏と浦野氏らの旧上京組がいる。叛旗はまだたいしたことなくて、基本的には仏氏がケチつけるという構造で、それに渥美氏や浦野氏が「危険だ」「もうちょっと着実に行こう」という感じでのっかる。

よっちゃんはまあ仕方ないから僕らに任せるという構造で、火炎瓶投げると決定する直前までいったのに、渥美氏と仏氏が組んで「責任持てない」と言いだした。彼らは圧倒的に少数派なんだけど、僕は長老の人たちをおしのけてでもやるかどうかと問われるわけだ。押しきってたらブントはもっとまとまりついてたと思うし、多数決とれば圧倒的に勝つわけだけど、結局妥協して丸太ん棒路線になっていくわけだよ。

それから一挙に右派が台頭してきて、小ブル急進主義批判だとか、労働運動やらなあかんとか、そういう意見がずっと出てくる。

――丸太棒かついで防衛庁というのもなかなか絵になる闘争で僕なんか感動した方ですが、そういうなかで六八年一二月の八回大会を迎えるわけですね。

第二次ブントの終焉と残された課題

●右翼的ブレが出てくるけど、一〇・二一はそれでも一応成功している。成功したにもかかわらず、仏氏とか渥美氏とかからみれば「あやういい」「危険だ」という感じでくる。じゃあやってみろっていうんで、次の一一・一二の指導を任したら、大打撃を受けるんだ。弾圧受けてたくさんパクられる。それが一〇・二一の闘いはまずかったというふうにすり替えられながら、八回大会を迎える。

そこで労働運動だとか組織だとかを錦の御旗にしながら仏氏が登場してくる。別に労働運動とか組織を強化するのは反対じゃないから、まあいいやないかということだけど、安保闘争の方針とか何のイメージも持ってないし、

組織だ組織だと言うけど具体的な組織建設の方針はなんにもない。八回大会は要するに、佐野氏が議長を降りて仏氏になったんだけど、政治局は基本的に再編されてないわけよ。僕なんかは大衆運動部長から今度は共産主義青年同盟を作るという話で、青対部の部長になった。だから八回大会は何にも決まらん大会だった。

――六回大会も七回大会も報告集は出ているし、何を決めたのかというのは明確なわけですけど、八回大会というのはその辺が明朗でないという印象がありますよ。

●八回大会はとにかく中途半端で、あとは学対だけ荒に変わる。その時に、高原でもいいという話もあった。仏氏や中井氏なんか、荒はわけわからんぞってな感じで見ていた。で、高原と荒が僕に相談に来て荒でいいんちゃうかという話で荒に替わって、高原は書記局員になる。

まあ、八回大会で関西ブントが主流派でやるという構造が崩れていることは確かだね。むしろ左翼反対派になる。だけどもそれで東大闘争はやる、東大闘争は荒が前面に立っているわけだけど、高原や僕がバックアップしながらやるという構造で、仏氏なんか何にもできないわけだよ。

――仏さんら八回大会の政治局に荒と高原さんと呼ばれて、革マルが出たからお前らも出ろというふうに言われたと聞いています。そこで論争になって、それでじゃあお前らの責任でやれと言われて、荒と高原さんとで引き取るという形で一月一七、一八日の安田講堂籠城戦をやったと。

●仏氏なんかあだこうだ言うけど、全然方針も何にも全国的な政治闘争とかでかい闘争になるとできないわけよ。そういう状況で東大闘争が社学同単独でやられて四・二八を迎えるということだ。四・二八も全然方針出さないわけだから、けっきょくわれわれが出す。青対部とか荒、高原とかで方針を出して、それで引っ張っていく。

仏氏の方はこれでは自分の地位を守れない、ガンは塩見だと。それで二月か三月かな、要するに塩見のリコールというか追放をやろうとした。不満分子を集めて、とにかく僕をはたき落としたら収まるみたいな感じで、政治局を再編成しようとする。味岡氏を入れようとするとか、よっちゃんと修復して中大と和解してとか、そんな動きが三月頃あった。佐野氏は欠席し、旭凡がふらふらして抱き込まれるような状況も生まれていた。

へんちくりんな拡大政治局会議みたいのを開かれて、僕は何か知らんけどつるしあげられるような構造になった。そうなったらもうどうするかって感じだよ。別に七回大会路線とか間違ってないと思ってたし。それまで、政治路線とか方針を出すということはあったけど、ブント全体の指導権を僕が握って何とかするとは考えていなかった。ところが、がーっと問いつめられて政治局やめろとか、やめろとは言わなかったけど事実上そういうこと

を言ってるわけで、そうなったら退くのか進むのか、どっちか判断せんとあかんと。もう一回関西に帰るわけにいかないと、こんな状況や。

それで赤軍フラクションというか、要するにフラクションつくるしかないと決意して、四・二八闘争を当面やりながら安保決戦を切り開いていこうと考えて、荒を含めていろんなオルグをかけていった。荒もずっとオルグして引きつけていたけど、あいつは東大闘争の件でパクられちゃう。パクられたらもう会いにいってもしょうがないから、そこで切れる。

――荒が逮捕されたのは六九年の四月一五日に九段会館で開かれたブントの政治集会の解散過程ですよね。その時、塩見さんは荒と共に司会をやっていました。

●僕は実行委員長兼司会だった。

――僕はあの時ブントの集会に初めて参加したんですが、ものすごく集まりましたよね、九段会館いっぱいに。

●そうだな、気合い入ってたよな。あの集会に破防法を結果的にかけられたんだけど、やろうという雰囲気はあった。それで、断固やろうというふうになっていく。

――そうなっていくと思っていたんですけど。

●その裏では仏氏の工作があって、僕の思いはもう仏氏になんか任しておいてもしょうがない、僕がやらなきゃいかんのだと、そういう自覚をやっとしていく。で、佐野氏とか旭氏、岡野、山下、荒、そのへんをずっとまとめていこうとした。ブント内部では僕と仏氏の対立がだんだん鮮明になってきて、どっちにつくかという話になっていきはじめた。

――その場合理論的なことは問題にならなかったんですか。安保闘争論とか。

●だから四・二八で鮮明になる。四・二八の総括で一一月が決戦で武装して闘う必要があるだろう、その後は革命戦争みたいな構造になるということで、われわれは過渡期世界論に立脚して、世界党―世界赤軍―世界革命戦争というか、その突破口開くという主張をやる。

それに対して労働運動やらんといかんとか、「ソビエトの建設が先か、軍建設が先か」とか、そういう議論が出てくる。叛旗は叛旗で、叛旗流の主張をし始める。

仏氏は破防法でモグラないかん。で、渥美氏が復帰して、それで中央派みたいのができる。ボルシェヴィキ・レーニン派ができる。理論的対立っていっても、世界観上の議論とかそういうのをやってる暇がない。だから戦術議論、路線議論というところに基本的には集約されていくような理論だと思うけどね。そういうのが進んでいってた。

それで七・六になる。誰も安保の方針出さないし、ある面ではうまくやれば全体がまとまってわれわれについてくるという構造もあったかもしれない。全局を見てこまめにずっと工作し

て、地方もオルグするとか、もっと僕が成熟した見通しもったら、ああいうふうにならないでいわば主流派に復活していくという可能性もあった。

ただ、組織としての思想的基準というか綱領的基準、組織建設の問題、運動の階級的基盤の問題、それからやっぱり権力問題、そういう総合的な問題が問われ始めているという点に関して、包括的な理論問題を提起し、あるいは綱領的次元で問題を提起していくというとこまで僕も含めてみんないきれていない。

基本的にはブントはみんな過渡期世界論の枠で考えている。僕流にいえば、そこを忠実に実現していくのかどうか、あるいは急進的にやるのか穏健的にやるのかという構造で分岐が進んでいってる。赤軍派があって他の人は別の世界観と別の路線で別個な対応をしたというんじゃない。行くとこまで行って、それからどうするかということだった。そういう意味じゃブントは赤軍派に代表されてたし、赤軍派が軸だった、少なくとも第二次ブントはね。そういうふうに僕は思っている。

――僕がブントに参加した頃にはもう一定の分岐が進んでいて、一方に赤軍派、他方に叛旗派がいて、渥美さんら中央派を軸に結集した部分というふうに見えましたが。

●それで七・六というのはね、僕はブントに責任を持つという決意を固めて、オルグもずっとやってるわけだけど、一方ではもう小競り合いみたいのが部分的に起こってきている。六月の政治集会の前にも、ブント内討論会とか明治でやって、フラクション同士で叛旗＝中大グループと、真ん中が中央派で赤軍派が反対側で議論した。そういう議論をしながらアスパック闘争は一緒にやっていた。

七・六は、どっちも武装しとってね、明大和泉で武装して構えてるし、各フラクションごとに武装している。われわれの方も武装して早朝から出かけて仏氏らを捕獲したという状況だね。仏氏を殴り飛ばした後で自己批判要求する。それがもとで仏氏が逮捕される。あれは明らかに僕の責任として考えているわけだけど、そういうのがあって除名騒ぎになったし、分裂という形で事実上第二次ブントはおわる。

――八回大会次第ではもう少し違う展開もあったのかなと思ったりもします。組織観なり、そういう点でのブントの弱さが克服されないままに、というふうな。

●八回大会で根本問題が出てた。過渡期世界論とか政治路線は良かったと思う。問題は世界観と組織観、そのへんの問題について詰めた問題提起が出されないままいった。それは僕個人からみたら明大闘争の時に実際起こっているわけだけど、そういう問題がブントの大きな弱点だったと思う。同時にじゃあそもそもブントはなんか、ということもあるんだよな。

（しおみ・たかや　元赤軍派議長）
（聞き手・吉沢　明）

第二次ブント三〇年

関西ブントは大衆と共にあろうとした

前田　裕晤

●ブント三〇年ということだけど、僕らにはブント三〇年という意識はないわけね。何故かというと、その前の六〇年安保の時と、さらにその前の共産党時代の分派闘争とのからみがある。「三〇年」というと、ブントができてくる過程での、共産党の中での様々な理論闘争、あるいは個別的な闘争に対する闘い方の問題から分岐が始まっていくということが、切れてしまうような感じがするのというのが一つ。

もう一つは共産党から割れてブントを作るときに、私の場合は労働戦線になるけど、当時の千代田丸闘争とか警職法闘争などの進め方をめぐって、共産党の中央主流とわれわれ職場の活動家たちとの間の意識の違いを感じだしたという経緯がある。

――なるほど。それではその当時の大阪中電(大阪中央電報局)のことからうかがいたいと思います。中電労研というのはいつ頃、どういう経緯で始まったんでしょうか。

●一九五〇年に中電に入って、当時はレッドパージの直後で共産党の細胞が壊滅しているなかで、同期の仲間四、五人と協力して細胞を再建していったわけだけど、いわゆる第一次大阪中電労研は、昼間学校に通っている連中が中心だった。

――昼間学校というのは、どこに。

●私は同志社(大学)に行っていた。当時は終戦直後で親は戦死、食うために

も、ましてや学校に行くためには自分で稼ぐしかないというのが多かった。私は親父がいないわけだから、勉強したけりゃ自分で金稼ぐ以外ない。だから夜は電報局で仕事して、昼間同志社に行っていた。夜勤組と言って、午後四時から一〇時まで働いて、昼間は大学に行く。私の場合、大学は同志社で、そのあと立命の大学院で四年半、その前に高校があるけど、一九六二年に研究生活をやめて中電支部の執行委員に当選するまでの一三年間、そんな生活が続く。

――他の人もだいたい同志社に。

●私は同志社行ったけど、立命(立命館大学)、関大(関西大学)、大阪大、大阪市大、大阪学芸、だいたいこの五つくらいで四十何人おった。その大学にいっとった連中で運動の問題を少し整理しようとして作ったのが、労働運動研究会で、経済学部に行ってる者は経済分析、法学部は労働法関係を担当するという形の研究会だった。

ところが千代田丸問題をめぐって、こら黙っておれん、単なる研究でいいのかとなった。そこで声明を出して、千代田丸問題の対処は納得いかないというアピールを出すところから始まる。

――第一次労研というのはだいたいつ頃からいつ頃まで。

●五三年の冬から五六年まで、三年間くらい続く。

千代田丸闘争と共産党中央への疑問

――それが闘争組織にかわっていく契機となった千代田丸闘争というのは。

●千代田丸というのは船の名前です。この船は海底に電信用の電線を敷設するための船なんだけど、アメリカ軍の要請で朝鮮海峡の海底に電信線を敷設することになった。当然そのためには当時で言う李承晩ラインを越えないと工事はできない。ところが李ラインを越えると韓国軍から弾薬・大砲が飛んでくる。

安全措置がとられない限り船は出航できないということで、その海底敷設船・千代田丸が所属する東京本社支部が出航拒否を指令した。その指令を巡って、全電通の東京本社支部の支部長ら三役が解雇される。

当時、本社支部は共産党の牙城で、それを中央本部の民同が嫌って電電公社の解雇を承認したということがあって、これはさすがに関東の共産党系のシンパ全部が反対闘争をやるんだけど、関西の共産党系は、「今は社会党との統一行動が重要な時期だ」という形で乗らなかった。

――東京と関西の共産党細胞同士が対立するわけですか。

●そう。それに対して、われわれはそれに公然と反対する。首切られた労働者を追放するとは何事やということで、千代田丸対策委員会というのを作って下からひっくり返しにかかる。大阪中電支部では、民同と共産党中電細胞の共同提案を全部支部委員会でひっくり返し、五七年の大会では千代

田丸の解雇を認めず闘うという方針を決めさせる。

それがまずあって、その次に五八年の警職法闘争となる。警職法闘争の時、大阪中央電報局が全電通の中央からストライキの拠点に指名される。その時の支部長が後に連合の初代会長になる山岸だった。その山岸が、あろう事かストライキ指令の返上を支部委員会で提案する。それでわれわれが頭にきて、それを支部委員会でひっくり返すわけよ。

ところがひっくり返したら、執行委員全員が講堂から直ちに労務の隣の会議室に共産党細胞の執行委員も含めて入っていく。これはスト破りの協議を当局も含めてやっているということで、活動家が全部夜喫茶店に集まって、ストライキ防衛せないかんということで臨時執行部を作った。

結論から言うと中央本部から「暁の妥結」で、中止指令が出て、山岸も救われたというわけや。ところがそこから、その時に臨時執行部を作ってもストをやろうとした共産党員と、民同の方針に同調した共産党部分との内部対立が始まる。反帝・反スタとか理論的なことではなくて、労働運動の活動家の中でどうも最近党の動向がおかしいんではないかっていうのがごろごろ出てくる。

で、私は警職法闘争が終わって五八年の末から五九年にかけて、同志社の方で私が共産党にオルグした学生後輩連中を集めて相談の場を持とうとした。最終的に五九年の夏に集めて話をしたら、彼らはいや実はもう共産党やめよう思う、ブントに組織替えするという話を聞く。びっくり仰天するわけだ。

ブントの組織化と第一次電通労研結成

――全然知らなかった？

●全然知らなかった。聞くと、同志社と京大はブントで統一している。立命は共産党中央と対決するのは賛成だけれども、ブントで一緒にやるかどうかで今論争になってるってわけよ。

彼らにしてみると、私は同志社で彼らをオルグした人間だけど、その時は私は立命の大学院生だった。で、あんたどうする気やと、逆に聞かれる。実は所属細胞は大阪中電だから、立命の細胞にいっさい顔出してない。職場の方でも何人もオルグしているから私だけの態度では決められん、ということで職場の労働者党員を集めて、実はこうこうこうなっとるがどうするかと相談した。で、大阪中電の中で五、六人がもう辛抱できないなあというふうになっていく。

中電から立命に昼間行ってる連中は、もともと私の方から紹介状つけて立命細胞の星宮たちを紹介していただけど、彼らは星宮を媒介にして、当時でいう革共同、革命的共産主義者同盟に惹かれていく。前田が同志社の連中と話したということがわかったとたんに、中電に革共同、今でいう第四インター系のオルグが大量にがばーっとは

いるわけ。

――立命のほうから、ブントよりも先に革共同の関西派がオルグに入ったんですか？

●そうそう。それと大屋史郎（西京司）。その時に「トロッキー、トロッキー」という話がでてくる。

たぶん京都でブントに組織替えをするという方針が決まったときに労働者は誰もいなかった。で、おるとすれば前田さん、あれは夜は労働者ちゃうかとなったらしい。大阪中電はどういう政治的影響力があるか、どんな位置を持ってるかということはたぶん彼らはわかってなくて、おそらく東京で相談したんだろう。その結果、古賀（東大農学部）――情況の古賀とは別人――と生田浩二の二人が大阪に飛んできて、東京ではすでに労働者と接触してる、だけど関西ではなんの手がかりもない、いわばあなたが初めてだけど、とにかく新しい党を作るために協力してくれという。

当時の古賀と生田、あの二人の情熱に負けて、わかった、じゃ一緒にやろうと。まず私だけが同盟員になって、そこから中電でのブントの組織化をはじめる。

――その時、古賀さんと生田さんはどんな話を？

●理論的なものは何も無しよ。だけど、その頃すでにわれわれは革共同のオルグは受けておった。革共同は、やれコミンテルンがどうのこうのとか言ってくる。あの頃よく言ったもんだけど、トロッキーは新左翼と違う、いままでの党内闘争の結果敗れたんやろ、それがもう一回よみがえるのは大丈夫かと。理論的なことだけで労働者組織を作って加入戦術というやり方に対してかなり抵抗もあった。

それと革共同の体質は受け入れられなかった。素直に闘争するんだったらするということしないと大衆的に誰もついてこないんじゃないかという論議

荒　岱介編著

ブントの連赤問題総括

真理を求めるものは正しい省察を求む

定価　一、二〇〇円（本体一、一六六円）
B6判　二二〇頁

あさま山荘銃撃戦――「同志粛清事件」はどのようにして起きたのか。その原因は指導者の個人的な資質に求められるものか。
当事の関係者と対質しながら、連合赤軍が孕んだ問題点の切開を試みる。
風雪の二〇年は何をもたらしたのか他、塩見孝也氏や植垣康博氏など関係者の主張も掲載

実践社

があった。

それから共産党との分岐になったもう一つのことは、六〇年一月一五日の岸訪米反対闘争だ。あの時、中電の青年行動隊は羽田に行く。行った連中はみな共産党員で、党の統制を聞かずに羽田に行ったということで、帰ってきたら、査問が待ちかまえていた。

――大騒ぎに？

●それから約一年間大騒ぎをやった結果、六一年に私と伊藤、青木という今までマル秘のはずの党員の名前が、『赤旗』紙上に「関西で最近、第一号のトロツキスト発覚」いう言い方で除名というやつがでる。その後、中電の細胞が解散し、ブントになっていくわけだが、その時、大阪中電の中では傾向として。構造改革派、それから今でいう第四インターの部分、ブント系と三つに分かれる。で、前衛党論とか意見が違うけれども統一行動ができないかということで、様々な統一戦線を模索してできたのが第二次電通労研だ。

――ブントということではなく、三派というか諸派の統一戦線的なものだったんですか。

●そう、その三派が集まる。集まるけども、構造改革派はすぐ出ちゃって、どちらかいうと民同と統一戦線組む。第四インター系と、ブント系、さらに社青同が参加して第二次労研になる。

ともかく、ブントの労働者部隊は、中電が入ってから一気に拡大する。その段階から京大、同志社、大阪市大の活動家を順番に労働運動の中に入れていき、これが効を奏する。まず全逓、それから広告労協。広告会社の労働者は大卒が多く、活動家が入ってる。その連中を全部糾合して、一時期広告労協の関西は議長、事務局長含めて役員の八割がたこっちだった。それと労音とか労演とかの文化組織をバックアップして、関西でいうと六九年の中電マッセンストの問題でブントの労対が解散するまで四、五百の労働者の部隊がおったんやないかな。

われわれがブントをつくったのは、当時の前衛党論をそのまま引き継いだ上で、自分たちの新しい前衛党をどう作るかということだったが、第二次労研の課題は、その党を具体的な大衆運動とのからみでどう作るのかということだった。そういう中で論議になったのが、われわれが作る組織とは一体何なんだと。まずは一朝一夕にしてはできないだろう、これが一つ。それと第二は組織だけが目的になるべきではない、運動とのからみでどれだけ貢献できる組織かというのが出てくる。

その背景には、当時の共産党に入党する時の必須文献の中に劉少奇の『整風文献』というのがある。大衆に誤りがあったとしても党は大衆の先頭に立てとか、そういう活動家としてのモラルとのからみがあって、今の共産党はおかしいという議論をしていた。

自分たちが党だという意識

――われわれも一九七〇年代には整風文献とか毛沢東の持久戦論なんか

に学びましたが、前衛なり党は絶対正しいということじゃなくて、誤りも犯すことはあるし、その中でどう鍛えられていくかが問題だというふうな議論をしていたんですか。

●労働戦線の場面でいうと、自分たちがどれだけ正しいかってことをいっても、大衆が受け入れてくれなければ意見は通らんわけや。自分だけ正しいと思ったら間違いだというのが前提にある。

それともう一つは、共産党の一枚岩の団結とかと言うのは欺瞞だという所から出発する。そこへ決定的ヒントを与えたのが小林勝という小説家の『断層地帯』という小説なの。動揺していた共産党員が小林勝の『断層地帯』を読んで、読み終わったらすぐ脱退、脱党届けを出しに行くというのが大阪の場合出てくる。

――どういう小説なんでしょうか。

●朝鮮戦争の時、共産党がつくった中核自衛隊の人の話だ。中核自衛隊で権力に捕まって長いこと拘置所におって出てきたら、六全協がすんで党がすっかり変わってた。自分が信用してた人が国際派で除名されてる。党とは何かと考える。よく考えたら自分自身が党ではないのかというような結論になるんだけど、それが六〇年になって自分たちの除名問題等で党と対立したときに、まさしく二重写しになってくる。自分達が党だという意識。

そういう問題意識をもって自分たちはブントに入った。ブントをつくった。だから、六〇年の安保闘争のあと、ブントが分裂して関西どうするかとなったとき、関西で当初はまとまるべきだと言っていたのが北小路(敏)、小川たちだったが、その彼らも全国委員会に行くということになって、労対は私が責任者だったから、労働者を全部集めて討論した。

当時共産同関西地方委員会労対部という名前だったがこれで独立しよう、関西地方委員会の労対部として全国の労働者部隊と連絡をとって、われわれが共産党から分かれてやりだした作業は、一回や二回の闘争でつぶれるものではないはずや、ということでわれわれは共産主義者同盟の名前は捨てないし残すという決議を六二年の始めくらいにする。それに関西の学対も同調して、それで公的組織として関西労働者協会というのをつくる。政治局を構成したのが、佐野茂樹、佐藤浩一、浅田タカシ、それと私らかな。

それで社学同の前線部隊としては新開、渥美、清田ら、その指導に浅田、佐野があたり、佐藤浩一と私はむしろ労働者教育ということで、大阪・京都で労働学校を始める。

もともと六〇年安保の六・一五前頃か、社会主義学生同盟だけではなくて、労働者の組織も必要だということで社会主義労働者同盟というのをブントはつくる。それは私らが表に出るよりも、オルグ専従者がなるべきだということで林紘義を責任者にする。

――前の『週刊労働者新聞』、今『海つばめ』を発行している人ですか。

●そう、昔『火花』とかを出していた全

国社研の林。社労同という名前もその時に本来はできたんだ。ともかく学生の社学同と、労働者の社労同という構想があったんだけど、ブントの分裂で全部つぶれてしまう。

それに対して、関西ブントはブントの全国組織をつくるために何回か全国会議を招集したり、統一の努力をする。その時に東京で実際に力になったのは、労働者部隊としては旧港地区委員会のメンバー。高橋良彦(松本礼二)とか、今評論家をやっている森田実、それに葉山(岳夫)もおったな。学生では味岡(修)など中大を中心としたメンバー。廣松(渉)が関わり出すのもその頃からだ。その間、味岡のプロモートで中大の自主講座を一年半続ける。

――それはいつ頃ですか。

●あれは六四年くらい。大学に金も出させて、認めさしてね。藤本進治さんが哲学、竹本信弘(滝田修)が社会思想史、私が労働運動史をやった。

その講師料の一部は関西ブント上京組の活動資金になったんじゃないかな。そういうブント全国化、統一再建の試みが何度も続き、つぶれては続く中で、ブントの統一委員会ができ、服部(信治=水沢史郎)とか、マル戦派とも統一してやろうということで、再建大会をやる。

統一再建から分裂をへて

――統一再建六回大会ですね。その当時、東京の労働者部隊というのはどんな状況だったんでしょうか。

●電通関係では、新宿局に桜井優貴雄、三田に高橋良彦(松本礼二)がいて東京の電通西南支部では高橋と桜井が論議を全部牛耳るという感じだった。それ以外に本社支部。それに郵政でいうと中野、牛込、貯金など。

そうやって、ブントはようやく再建された。そのことの位置づけが問題なんだけど、労働戦線の立場から言うと、これから自分たちがブントとして出ていくときに、内部的な意見の不統一が組織的分岐になるなんてことはまず考えられない。自分たちの力をどう拡大していくのかが主眼で、それと闘争をどう打っていくのかという、つまり党というものは闘争との関係で常にセットになって考えていた。

だから七回大会でマル戦派を追い出すかどうかという論議になった時には、正直言って信じられなかった。最後の調停ができるのかどうか私の家で佐藤とか、服部、成島たち主要メンバーと討論して、そこで意見の一致をみて東京へ飛んで来るんだけども、東京に来てた学対の連中はすでに先鋭化していた。

――前田さんにとっては唐突というか。

●唐突やな。タッチしてた連中も私の前ではなるべく言わなくなっていた。たぶんその頃から私に対する「大衆運動主義」というレッテルが張られていたのかもわからん。

――七回大会でのマル戦派との分裂が六八年三月で、六九年の七月には赤軍派が分派する。分裂自体は結果

的にはやむをえないとしても、何が問題なのか、組織的に問題が整理されていくようなことがとても充分ではなかったように思えます。

●今から思うと、それほど理論的な問題で分裂したんかなと思うよね。その時々の闘争の位置づけと闘い方をめぐって分裂したような気がしてしようがない。いまだに思うけど、マル戦と具体的に論拠としてどこが違ったのかと。理論的問題というよりも、当時のブントが一番優れていた点は、闘争をどのようにして闘ってどうするかということだった。そこのところが革共同の当時でいう全国委員会、後の革マルと中核からつけ込まれる隙があって、主体性がないじゃないかといわれる所以だったのかもしれない。

だけど今の時代に戻ってもう一回考えててみた場合に、組織とは一体何なのかということが問われる時が来ているわけだから、ある意味では関西的な発想というのは時機を得ていたんではないか。

それと七〇年闘争になっていく過程の中で学対とわれわれとの間で亀裂が出てくるのは、その時主力になるのは共産党経験者じゃないよな、学生運動の指導者は。そうすると、共産党中央との闘争をやってきて党から解放されてこれから自分たちの組織だと思ってブントをつくったわれわれと、そういう経験のないところで戦術に固定してこれやるしかないという設定だけでくる学生連中との対立という風になる。

東欧激変をへた今考えること

――学生運動の側は全学連を再建して七〇年安保を闘う、そのための戦術というふうに進んでいくが、労働戦線ではそうはいかないということでしょうか。

●そう思いますね。労働戦線の場合は役職を担っているやつがブントのメンバーであろうとなかろうと、それが大衆に受け入れられなかったらその政治

黒田寛一の唯物論

文人　正　編著

定価　1200円

せんき社
埼玉県蕨市塚越1-13-3
塚越ビル
048(445)2921
振替：00170 7-22610

(本体1166円+税34円)

黒田寛一の唯物論理解はロシア・マルクス主義をこえているか。本書はそれがパラダイム的に近代主客図式の枠内にあることを、廣松哲学の視座から剔抉する。

力はなくなるわけだ。他の組織からブントの労働戦線の連中はオルグに来るとき統一した中身で言ってないと盛んに言われたけど、それはそれで、その労働者のおかれている状況を把握して上でやるわけだから、それなりの力を発揮する。

労働運動というのは哲学者の運動ではない。その意味では私はヘーゲルはいいこと言ってる。哲学者は常に悲劇である。大衆よりも五歩七歩先を行くが故に、常に断絶が生じる。英雄というのは大衆より一歩先にしか行かないと。その英雄というのは常に大衆と共にあるんだ。その英雄を労働運動の場面に置き換えたら、労働運動の場合はマスの運動だから労働者が納得しないとついてこないというのが前提にある。

自分の思っていることが始めから十が全部十として確立されるとは思わない。やり方によっては一からなのか、うまいこと言って三からなのか、あるいは〇・五からということからでもやらないかん。その発想というのは、前衛党観とのからみで整理されないまま、あいまいな形になってしまったけれど、大事だと思う。

――党の場合でも、大衆が受け入れるというか、少なくとも意識的な人々が納得するなり、そういうことが必要だと。

●だからその場合も、党自身をどういうものとして考えるのかによって変わってくる。かなり思想的に将来を見越して、今とは断絶していてもこういうものが必要なんだというように設計するやり方、これは昔の共産党が作ってきたやり方だが、その決定のもとに次第に下に降りていってオルグして作っていくというやり方。

だけどその場合、下へいく時にそのやり方についてかなり度量を広く見ておかないと、下は自分自身の存在まで否定されるわけや、そこの問題が整理されてないところへ東欧激変以来の様々な問題が出てきて、最初の前衛党観からもう一度問い直さなければならない時期にきていると思う。

果たして、定型の党組織論はあるのだろうか、若干の相違を認めた上での「共同戦線」という表現もあるし、検討されねばならない課題だと思う。

（まえだ・ゆうご　元大阪中電労研）

（聞き手・吉沢　明）

第二次ブント三〇年

激闘の六〇年代とマル戦派

成島　忠夫

――成忠（なるちゅう）さんは静高から静大に行かれましたが、六〇年代のブント・社学同、特にマル戦派には静高出身者が多かったですね。

●静高社研の出身者では安保ブントの指導者で生田浩二さんがいて、安保の後にブント革通派の指導者になる服部（信司）さんがその三年くらい下かな。望月（彰）さんが服部氏と同期、その一年下が矢沢（国光）さん、またその下が成島道官さんと続いていく。ただし矢沢さんは社研じゃなかった。

一方、静大にも結構動員力を持つブント細胞があって、それとの連関もあった。吉川（駿）さんは第一次ブントの静大細胞だ。道官さんは私と同級で、彼は一年生のときから社研でやっていたし問題意識もあった。一、二年生のころは、まあ穏やかに読書会中心の活動だったけど、三年になると安保闘争が盛り上がってくる。六〇年の六・一五で樺美智子さんが殺されたときは、静岡市内で三〇〇人くらいでデモまで打った。道官さんは凄く有能だったね。学校当局の弾圧を乗り越えてやったわけだし、アジテーションも凄かったし、人格的にも素晴らしかったと思うよ。我々の世代の後には、見崎（信儀）さんとか浜下（武志）さんとか、また錚々たる顔触れが続くわけだ。

六二年段階では、関西は京都府学連が残っていたけど、東京の社学同系で

は東大の佐竹(茂)さんや矢沢さん、望月さん、古賀(運)さん、多田(康男)さん、今井(澄)さん、豊浦(清)さんといった人たちの運動と、それから静大の吉川さんや私たちの運動(静大社学同)と、大衆運動をやっていたのは殆どそれくらいしかなかったと思うよ。六二年の大管法闘争のころまでは東大の社学同は皆一緒にやっていたわけだ。大管法のころはしょっちゅう東京に出ていったんだけど、東大経友会のボックスに行くと、多田さんたちがいたな。

『経済評論』に岩田弘の「現代資本主義と国家独占資本主義」が掲載されたのが六二年六月だった。それまで服部さんはサラリーマンをやっていたけど、ちょうど鈴木鴻一郎を猛烈に勉強していたところで、岩田論文が出てから矢沢さんと道官さんが岩田さんを訪ねていったんだと思う。ここで、服部さんが望月さんや矢沢さん、成島道官さんらをオルグってマル戦派の原形のマルクス主義戦線委員会を作った。マルクス主義戦線委員会というのは政治同盟というよりフラクションに過ぎなかったけれど、ここで望月さんは古賀さんたちと一回袂を分かつ形になる。

当時の服部さんの問題意識は、第一次ブントの姫岡理論を乗り越えなくちゃならないということだったと聞いたことがあるけど、岩田経済学で姫岡理論を乗り越えることができるという確信を持てたことで、あの人はもう一回党派運動をやる気になったんだと思うよ。それで東大と静大に拠点を作る。

道官さんも苦労して東大に行くわけだけど、学生運動をやるためには東大に入らなくちゃならないって使命感に燃えてたんだから、あいつはエラい(笑)。西部(邁)さん、佐竹さん、江田(五月)さんのあと、六三年の東C(東大教養学部)の委員長が道官さんだったと思うな。六四年に横須賀にポラリス潜水艦が来る。道官さんがフロント(社会主義学生戦線)と組んで民青を打破して、それでポラ潜闘争が出来るわけだ。

その後、六五年の駒場の自治会委員長を浜下さんがやって一定の勢力を確保する。あとは望月さんが学芸大に入り直して、他にも立正とかに基盤を作る。慶應は栗本(慎一郎)さんがいて、その二学年後輩が一昨年暮れになくなった坂ちゃん(故・坂内(ばんない)仁氏)だ。

静大のキャップの吉川さんが卒業して、東京で労働者運動をやるということで就職したのが確か六四年だったかな。共産主義者同盟マル戦派という「党」を作ったのがこの年だ。吉川さんと望月さんは気が合っていたからコンビで労働者部隊を作っていく。

中核派もそうだったけど、結局労働者部隊を作らなければ駄目だというのは当時の活動家の常識になっていたわけだ。一つは、六〇年安保の後に独立してやっていたいろんな労働者運動ともう一回連絡がついてきたということ、この点では望月さんの力が大きかったと思う。それを吉川さんが組織として作っていく。東京のいろんな労

組の青年部、青婦部に足場を持ったわけだ。ただ実際には、望月さんは産別委員会を作ろうという発想だし、吉川さんは「職業革命家の党」ということで産別じゃなく地区組織で作っていくべきだといった具合に、二人の間に悩みも対立もあったとは思うけどね。

六五年は日韓闘争の年だったよね。マル戦派は、海外進出は日帝の延命策、「弱い環」だからこれを叩くんだという理論を立てて日韓闘争に全力投球した。社学同系ではマル戦派が一番情熱を持って日韓闘争に取り組んだわけだ。事実上、日韓決戦論だもの。日本革命を突破口にして世界革命へという戦略がおぼろげに出てきたというのも、このころだと思う。六五年になって急速に活動家が出てきた。早稲田では見崎さん、松井(透)さんが中心になって、早大一文でストライキを打って物凄い動員力を示す。一文だけで社学同が三〇人くらいになっちゃった。

浜下さんも東Cのストライキで退学処分をくらうし、皆一年間学業も放り出して日韓闘争に集中していたわけで、考えてみれば、特に東大の活動家にはずいぶん負担をかけたと思う。ただ、東大の活動家には服部さんの人気がなくてね(笑)。合宿やっても東Cの活動家なんて出てこないんだ。

――東大は結局、道官さん、石田(寿一)さん、山崎(順一)さんの人望で持たせていたと。

●道官さんの人格と、石田さんの真面目さと、山崎さんの頭の良さという感じだよね。マル戦派の社学同全国委員長が石田さんだったのかな。あのころはマル学同とか解放(社青同解放派)とかを含めて石田さんのアジテーションが一番だった。

――ただ、日韓闘争が終わった後の反動もきつかった。

●それは来たね。物凄く来た。党派カードルになろうという者以外、本当にいっぱい活動家が離れていったよ。そう言えば、この年だと思うけど、いいだももさんたちと一緒に党を作ろうかっていう話があったな。いいださんも岩田理論を評価していたからね。でも結局、いいださんたちは共労党(共産主義労働者党)を作るし、我々はブント統一委員会と合同して第二次ブントを結成することになるんだけど、何が一致しなかったのかな。もう覚えていないな。

全学連副委員長時代

――ところで関西ブントの人たちが東京に出てきたのはいつころからですか。

●早大学費闘争の時(一九六六年)に、塩見(孝也)さんが早稲田にオルグに入って、政経の村田(能則)さんとか一法の荒(岱介)さんとかをオルグしていたのは覚えているけどね。生協連に勤めるということで佐藤浩一氏はもっと早くから上京していた。次が渥美(文夫)さん、浦野さん、塩見さんあたりだよね。佐野(茂樹)氏はまだ関西にいたと思う。

関西ブントには第三期論というのがあったけど、日韓闘争で大衆運動が出来なかったということで破産したということになったわけだ。なんでマル戦派はあないに大衆運動が出来るんやということがあったはずだよ。当時、理論の優劣の基準というのは大衆運動が出来るかどうか、パトスが湧くかどうかということでしょう。

――一九六六年のブントの大合同のとき、成忠さんはどう感じていたんですか。

●これは言っちゃならないことだけど、不安だった(笑)。私は関西ブントとは一緒になってもいいと思っていたんだけど、東京の旧ＭＬなんかとは肌合いが違いすぎると感じていたんだよ。日共港区委の委員長だった山崎衛さんもあの合同の最終局面で入ってきたわけだ。山崎さんは服部氏がオルグったんだけど、もともと良っちゃん(故・高橋良彦氏)の人脈かも知れないな。それとたぶん望月さんと古賀さんたちは、旧革通派同士、再建社学同同士の信頼関係が大きかったんだろうな。

関西ブントの人たちも、六六年ころまでは皆、大学を卒業したら普通に労働者になって労働運動をやるつもりでいたんだよ。それがマル戦派と一緒になって第二次ブントを結成したことで、刺戟を受けたんだな。マル戦派は「革命戦略」という視点を出して、危機論と革命の現実性という問題を結び付けていた。塩見さんなんかも、これはマル戦の功績だって評価していたんだよ。

それで関西ブントも単なる労働運動家じゃなくて「革命家になるんだ」って、びしっと背筋が通っちゃったんだ。だいたい私だって、道官さん、石田さん、山崎さんと四人で東京の学対をやっていたわけだけど、明大の「二・二協定」の後始末で全学連副委員長をやれっていう「赤紙」が来るまでは、もう大学を卒業して労働運動をやるつもりで就職先まで決まっていたんだよ。

――そこへ二・二問題が文字通り勃発した。ここから「我らが副委員長」の出番になるわけで、不眠不休で全国を走り回らなくちゃいけない。成忠さんの恐らく最も多忙な一年ということになったわけですね。

●第二次ブントから明大に派遣されていた学対が塩見さんと私だった。塩見さんははっきり言えば関西派の組織作りのために明大に張りついていたんだけど、二人で上原(康男)さんとか重信(房子)さんとか、二部の人たちを一部から分岐させた。まあ二部は最初から一部に対して、ちょっと反発していたところがあったんだけどね。塩見さんは徹底抗戦論だしマル戦もそうでしょう、だから意気投合してやっていた。それで、私はまさかあんな問題が起こるとは思わないから二月二七日に結婚式を挙げることにしていたんだよ。二月一一日に建国記念日反対の屋内集会があって、二月一九日に全学連の拡大中央委員会があって、明大闘争の後始末としてブントは全学連委員長のポ

ストを中核派に引き渡す。

ここからは何よりもブント、社学同の名誉回復が絶対的な責務、プレッシャーになるわけだ。結婚式の前日の二・二六が砂川闘争で、結婚式の次の日が二・二協定粉砕の明大闘争、この日のデモ指揮で逮捕だ(笑)。既にもう名誉回復の闘いが始まっていたんだよ。

――明大闘争当時の『戦旗』の論調をなんとなく覚えているけど、「徹底抗戦」とか「内乱主義」とかの空語だけという印象があります。結局、明大社学同の現場活動家たちがそれにそっぽを向いてしまったというのが、二・二協定の一側面でしょう。

●マル戦は、革命のために学生運動を利用するという発想が露骨だった(笑)。そういうのと明大や中大の運動体質は違うんだよな。もっと余裕があるというか……。浅田光輝さんもマル戦の徹底抗戦論なんて莫迦げているって言っていた。ただ、ああいう形でぶざまに収めたことに問題がある。あれじゃ「暁の脱走」でしょう。二・二協定の当事者がトンコしちゃうわけだよ。もっと自信を持って、徹底抗戦論者の主張とは違って大学は「革命の工場」じゃないんだときっちり言って胸を張っていればよかったんだと思うね。実は第二次砂川闘争から秋の羽田闘争への流れの原点は二・二協定なんだよ。名誉回復せねばならないというプレッシャーが大きくて、秋の街頭闘争もある意味ではそのライン上にあったわけだ。

もう一つ、明大の現場をああいう形で追い詰めてしまったあおりを翌年になってマル戦がかぶったのだとも思うね。二・二の後、ブントの内部でマル戦―関西のゆるやかな連合に対して旧ＭＬ・独立系が後退する。一年後、その旧ＭＬ・独立系と関西の連合軍にマル戦が第七回大会で敗北すると……。

たぶん、この背景には関西ブントの組織戦術があったわけだ。東京に出ようにも、マル戦派は岩田理論でがちがちに凝り固まっているし大衆運動もあって手強い、だから旧ＭＬ・独立と組んで作った統一委員会を足場にして東京に出てこようとしていた。ところが二・二問題が勃発する。塩見学対部長は私に全学連副委員長をやってくれと言って関西に引っ込んじゃう。学対部長の後釜は道官さんがやることになる。砂川闘争のときに塩見さんが「成忠、あとは頼むぞ」って言ったのを覚えているよ(笑)。それで、中核派の迫害(笑)をはねのけて、一〇・八、十一・一二までそれこそ必死になったわけだ。やがて中核派とのバランスも回復して、逆に信頼関係も生まれる。

二・二の時点では、信頼なんてないよ。そもそも彼らは六六年から、第二次ブントというのは全学連委員長を取るための野合でしかないって言っていた。二・二でそれを証明した形になっちゃったわけだからね。二・一九の全学連集会のときに中核派が角材を準備したという噂があって、山崎さんと私とでこっちも用意しようかって話し合ったのを覚えているけど、そういう

緊張関係があったんだ。東工大でやった夏の全学連大会のときも、中核派が角材を準備しているって情報があったな。このときは、こちらも完全にその気で乗り込んだけど。

羽田空港に進撃した日

――二・二六、五・二八、七・九と第二次砂川闘争があった。どれも全都レベルの大きくて激しい街頭闘争だったけど、あの過程で三派全学連の勢いも動員力も一気に増していきましたよね。

●自然発生的にだけど、五・二八で投石が出る。これも秋のゲバ棒闘争登場への伏線になる。あの日は、午前中に早稲田で革マル派とのゲバルトで投石戦をやって、午後は砂川で機動隊に投石した(笑)。五・二八も私が総指揮をやったんだよ。

――七・九では竹竿を使って機動隊の防石ネットを突破する「実験」をやったとも聞いていますけど。

●それは知らないなあ。でも、砂川というとまず『流血の砂川』(編注＝映画の題名)のイメージがあったでしょう。実力闘争だ。そして何と言っても現地の反対同盟が「この米侵略機をベトナムに送るな」というスローガンを掲げたことが大きかった。ここから本格的に、日本のベトナム戦争加担に対する大衆闘争が始まったわけだ。一〇・八だって一一・一二だって、ベトナム戦争加担を阻止しようと本当に思って闘ったその結果だよな。全学連からべ平連まで含めて、そういうことを考えて必死に闘った青年たちがいたんだということは歴史のなかに記録されるべきだと思うよ。

――七月に全学連大会があったわけですが、このときには秋にまで引き継がれる党派的対抗関係の基本構図はもう出来ていたわけですよね。

●一〇・八と一一・一二の羽田闘争につながる、ブント・解放・ML(社学同ML派)・第四インター(社青同国際主義派)というブロックと中核の対抗関係は、いちおう基本的には出来ていたね。正確には、ブント―解放というゆるやかな連合関係があって、そこにもう一つ、ブント―ML、第四インターという連合が合わさっていた。第四インターはすでにOLAS路線を評価して、プロレタリア国際主義を掲げていたし、もう「武装」と言っていたかも知れない。MLは文革で燃えていたしね。全学連大会のときにML派の畠山さんと第四インターの中沢さんと私の三人で、「秋は徹底的にやろうな」って固く約束したよ。それとね、六四年ころ、静大に、黒岩(卓夫)さんと、だいぶ前になくなった河北さんがML派のオルグに来たことがあるんだよ。それで喫茶店で、河北さんが私に「警察官を射てるか?」って言うんだよ。当時の静大社学同はどちらかというと「革命青年」というより「良心的インテリ」の集団だから、凄いこと言うもんだって思ったけど、彼らはそのころから「武装」という発想が明確にあったんだな。

それで一〇・八の佐藤訪ベト阻止闘争それ自体についてだけど、いくつかのファクターが絡んでいるんだ。九月に社学同の全国大会をやるんだけど、その月の『社学同通達』に「空港突入」という方針を出した。政治局もこの方針を追認するわけだ。実力闘争一般ではなく具体的に突入せねばならないということになると、戦術をきちんと考えなくてはならなくなる。それが一つ。

もう一つ、九月には二回くらい小さな羽田闘争をやっているんだけど、これが徹底的に機動隊にやられた。ぐしゃぐしゃにされて物凄い屈辱だったわけだ。これで正面から、つまり穴守橋や大鳥居駅、空港入口駅からデモで警備線を突破するというのは結局殆ど不可能だと思ったんだよ。それで大森海岸駅から鈴ヶ森ランプを駆け上がって高速道路から空港突入という奇襲的な戦術を考えついたわけだ。立正の誰かが持っていた車に乗って、私と山崎さんで鈴ヶ森ランプを下見に行って、よし大丈夫だということになった。

1968.1.17エンタープライズ寄港阻止闘争

それで一〇・八当日は大森海岸駅で、いきなり皆を電車から下ろして、一気に突入させた。もう一方的だったよね。道の両側に機動隊がバタバタと倒れていたくらいだもの。四派の全学連部隊が高速道路に上っていったのを見届けてから、私は萩中公園で行われていた反戦青年委員会の集会に駆けつけて「今、全学連が空港に突入した」ってアジったわけだ。皆、いっぺんに空気入ったよ。実際には、高速道路に上ってから左と右を間違えて東京方面に突っ込んじゃったわけだから、後で中核派から「成忠は嘘をついた」って言われたけど(笑)。事前の下見をしていたのが道官さん、山崎さんと私だけだろ。だから先頭のやつが間違えたら、後もそれに続いてしまったということなんだよ。

――あの時はかなり行ったところで、ア、いけない、間違えたって気づいたんですよね。たしか、観光バスを止めて空港はどっちですかって聞いたら、何と空港は後ろの方だった(笑)。それで機動隊ともう一戦交えて高速道路から押し出されて、また電車に乗って大鳥居から穴守橋に向かったわけですね。

●もう一つのファクターが、一〇・八の前日に解放派の全学連書記長・高橋(幸吉)君や都学連の北村(行夫)君が法政で中核派に拉致されリンチを受けるという事件が起こったこと。全学連内部で中核対反中核連合という対抗関係がここで完全に鮮明になる。彼らを何としても救出しなくちゃならないということで、中大に集まっていた四派全員に角材を持たせて法政に押しかけた。これは衝突しに行ったわけじゃない。軍事的圧力をかけて、彼らを解放させようとしたわけだ。やるならやってやるぞという気はあったけどな。確かこの角材が翌日の一〇・八に流用されたわけだ。

――九月に砂川でマル戦系の学生細胞の合宿があって、秋はプラカードなり竹竿なり、とにかく武器を使うぞって話になったと聞いたこともありますけど。

●それは覚えてないなあ。七日～八日の角材は誰が準備していたのかな。思い出せないんだよ。鈴ヶ森からの突入という戦術は我々だけど、棒を実際に準備したのは、山崎さんでないとすれば、ひょっとしてML派あたりかもしれない。

――味岡(修)さんに聞いたんだけど、当日朝、棒を中大に忘れたまま出掛けちゃったんですよ(笑)。別の任務で中大にしばらく残っていた何人かが御茶ノ水駅まで部隊を追いかけて渡したんだそうです。

●中核派は萩中公園の反戦集会から出発して弁天橋で装甲車を占拠して闘い、山崎博昭君が虐殺される。鈴ヶ森ランプから転戦してきたブントは穴守橋で投石戦のあと装甲車を片端から燃やしてしまう。どうも発想が少し違った(笑)。それで一〇月一七日に山崎博昭君中央葬が日比谷野音であるわけだけど、中核派が国民葬というのに対してブントは人民葬を対置した。はっきり言えば難癖をつけた(笑)。

当時の判断として、中核派は春の統一地方選挙で美濃部支持をうたって北小路敏を立候補させたように、新左翼の小さな基盤から離陸してもっと大きな国民運動的存在になろうと志向していた。それが折につけて出てくるのを、ブントは左から叩こうとしたということなんだ。だから、一一・一二の第二次羽田闘争で中核派はゲバ棒闘争をやらないかも知れないという観測もあったんだよ。たぶん中核派もブレていたんだ。王子野戦病院開設阻止闘争のときだって、角材について「プラカード保持の権利」なんて言ってたくらいで、中核派が明確に武装の論理を位置づけるのはだいぶ後の話だ。それが一一月に藤本(敏夫)さんや高原(浩之)さんたちが、関西では中核派がダ

ンプで突っ込むなんて言ってる、俺らも相当気張らにゃあかん、と報せに来た。王子闘争の後に中核派は一〇月からの闘争を振り返って「激動の六か月」と言いだすんだけど、それが開始されたということだ。

我々の場合、一一・一二は最初からゲバ棒闘争だと決まっていた。だから最大の戦術問題は結集した何千もの部隊を、武装したままの状態でどうやって翌日まで保たせるかということだったわけだ。そこで、機動隊が入る寸前まで中大にいる、それで駒場祭をやっている最中の東Cに移す。駒場祭実行委員会はフロントが取っていたから、そことすぐ交渉する。それと佐藤首相の私邸が駒場の隣駅だから、陽動が効けば、警備の重点はそちらになる、何とか朝まで頑張れれば一般学生が登校してくるから機動隊も入って来れない、という読みで行ったわけだ。

――中大でも東Cでも、中核派は四派に置いてけぼりにされましたよね。ところで関西からの上京部隊はどうだったんですか。

●一〇・八にはあまり関西の部隊はいなかったけど、一一・一二には思い切り気合を入れて一杯出て来たね。一一・一二で駒場にバリケードを作ったのは関西ブントの人たちだ。彼らは動きが凄く組織立っているなという感じだったよ。

マル戦対 関西ブントの対立

――二つの羽田闘争を終えて一二月はじめにブントが品川公会堂で「羽田闘争報告集会」をやるでしょう。あそこで関西ブントから突如「組織された暴力とプロレタリア国際主義」という言葉が出てくる。私はこれじゃ当時の社青同国際主義派のスローガンと変わらんじゃないかと思ったけど、このころから第七回大会に向けてブント内部の対立関係が一気に噴き出してきた。

●関西の急進主義ね。山崎さんなんかはこうした急進主義的傾向に対して明確に否定的だったから、「実力闘争」という視点だった。ただ「武装闘争」という新しい視点に対置するのに旧態依然の「実力闘争」じゃ無理だったと思うよ。六八年一月のエンタープライズ闘争のとき、「無色透明な実力闘争」という迷言が出て、そんなんじゃ駄目だ、闘えない、関西にも反論できないって、東大の会議で川上(浩、故人)さんや清井(礼司)さんあたりが猛烈に突き上げていた。でも多分このころまでは、まだどうにでもなったんだ。とにかく一番決定的だったのはエンプラのときの東京の街頭闘争がしょぼいもので終わってしまったことだよ。

一月一七日の佐世保のゲバ棒を中核派の分まで含めて準備したのもブントだし、あの日先頭で突っ込んだのもブントだし、連日きっちり闘争していたことも、行った連中は皆分かっていたんだから、佐世保からブントが中核派より一日早く撤退したのが悪いなんてことは大したことじゃないんだ。PB(政治局)から佐世保に派遣されてきた

現場責任者が新開(純也)氏で、学対が私で、二人で二〇日に撤退するって決めたと言っても、それは新開さんと服部氏が電話で連絡を取り合ってPBが了承していたことなんだし。私は佐世保で東京の外務省突入闘争とかのニュースを見て本当にがっくり来たよ。

『戦旗』の一月五日号一面に載せた私の論文では「革命的内乱」なんて書いたんだぜ。一一・一二の次の日の一般紙では「まるで暴動だ」なんて書かれたけど、エンプラの東京でも本当に暴動的な闘争をやるつもりだったんだもの。中核派は佐世保一点集中だ、でもブントは東京と佐世保の双方で目一杯やるぞ、というはずが不発に終わった。中核派はここで失地回復した。はっきり言って、東京に残ったブント学対は突き詰めてなかったんだよ。俺たちは佐世保で突き詰めてやったぞ。だって一一・一二のあとのエンタープライズ闘争だよ。いくら角材を準備していたって無色透明な実力闘争なんて話じゃ無理に決まっている。これが結局、ブント内部でマル戦派の責任だということになったんだと思うよ。各現場でも、ただの「実力闘争」じゃ駄目だという雰囲気だったろう。そういう時代になっていたんだ。

もう一つ、安保ブントがそうだけど、そもそもが世界革命とか国際主義とか暴力革命とかというのがブントの基本発想でしょう。関西ブントの国際主義と武装、同時革命というのもそういう流れを受け継いでいる。マル戦派はそういう点では異質だったんだよね。だからマル戦派の分裂後に従来の体質を受け継いだ「マル戦の主流」はやはり後の前衛派だよ。彼らは七〇年代、労組運動を中心とした一種サンディカリズム的な運動に行き着く。党組織を作るというような発想もあまりない。それに対して我々怒濤派(労働者共産主義委員会)とかL協(レーニン主義者協議会)は、マル戦派の理論体質を克服して第一次ブントをどう受け継ぐかと問題を立てていったわけだよな。

でも結局、エラそうにしていてもマル戦の最高幹部は岩田さんのエピゴーネンに過ぎないとバレてしまったということじゃないかな。六七年夏に服部さんが『共産主義』(第一〇号)に「階級形成論」を出して、「夜昼論」じゃないか(編注=「昼は労働者、夜は市民」という理論ではないかという批判)と猛烈に攻撃される、それに対してろくな反論も出来ないわけでしょう。まず、あそこでメッキが剥がれたんだと思うな。あのとき高原さんが「政治党派の書記長は、哲学的なこと書いたらあかんのや、政治だけやっとればよろしい」って言ったのを覚えている(笑)。

——あの「階級形成論」は揚げ足の取りやすい論文というか、意識のなかにまた意識があって……というマンジュウとアンコみたいな理論で、マル戦のなかでも評判が悪かったですよね。

●あれで、マル戦はブントの中での理論的な権威性を失ってしまったんだ。

党外の学者の言うことをオウム返ししとるだけやないかと見られてしまった。党外の学者の主張を繰り返しているのなんて革命党派の組織やない、ということになっちゃったんだよ。そういう批判が関西から出てきたのに対してマル戦は答えきれずに皆消耗したわけだ。東大と早稲田の細胞は、それが契機で離れていってしまう。

——ブント七回大会直後のマル戦派の学細代(学生細胞代表者会議)で東大の川上さんと早大の松井さんが、岩田さんの名前を出さないで「党外学者が」という言い方をしながら服部さんを猛然と追及していたことを覚えています。

●マル戦派の分裂後にL協になる人たちはそうだったよね。

——ところで佐世保のエンプラ闘争では生木を伐って角材を作ったとかという話を聞いていますが……。

●九州のあのへんの山が実家だという活動家がいるってことを望月さんが知っていて、その人と連絡を取って山の木を伐って準備した。それを梱包して鳥栖の駅に隠しておいて、急行の三分間の停車時間中に運び込んだわけだ。当時、中核派は「ブントは唯武器主義だ」という批判をしていたし、中核派があの日、棒を準備していないってことは分かっていた。それで秋山(勝行、全学連委員長)さんに、残りの棒は置いていくからよかったら使ってくれって言ったんだよ。じゃあ、あの日、中核派があらかじめ何を準備していたかというと肉弾の特攻隊なんだな。何人かが金網に取りついて基地に突入したのを見て、ああそういうことだったのかと思った。

——聞いていると、あのころの街頭闘争を実際に取り仕切っていたのは学対数人を中心にして各大学細胞の指導部だけだという気がしてきますね。

●そうなんだよ。中核派は現場に政治局員が出てきていたよ。ブントでPBクラスが学生の現場に出てきたというのは、一一・一二に佐野さんが私にもやらせてくれって来たくらいだ。だからPBに対する信頼感がなかったね。マル戦派の分裂が、旧PB主体の前衛派、労対・学対主体の怒濤派、学生細胞指導部主体のL協という形になった遠因はここにあるんじゃないかな。

痛恨のブント第七回大会

——エンプラの後あたりから、マル戦対関西というブント内部の対立が殴り合いまで伴って一気に激化しつつ、三月末の七回大会に行くわけですね。

●七回大会には私は痛恨の念を持っているよ。それまで何年も懸け営々として築き上げたものの全てを一瞬にして失ったんだから。人生の勝負を懸けた仕事だったのに、決定的なところで私は一回だけ判断を根本的に間違えた。未熟だったんだよなあ。無念だよ。PBでは特に吉川さんなんか本当に残念だったろうと思うね。ブント大会二日

目に欠席したということ、これは責任ある革命家の組織のやることじゃないよ。たぶん岩田さんの判断に服部氏が乗ったのが真相だと思うけど、大会に出て採決で負けたとしてもそんなの別にいいじゃない。私は、信義を、「紳士の約束」を、最初に破ったのは明らかにマル戦派の側だと思うよ。マル戦派がいなくなることで、残ったブントの連中にだって重荷をかけたわけだ。それで関西は小ブル急進主義だなんて言ったって駄目だよ。

あと、マル戦は心が狭かったな、はっきり言って。服部氏が典型だけどエリート主義で他のブントを見下しているところがあった。牛乳労組なんかの中小の争議に対しても、労組青年部で正統的な労働運動をやっているマル戦の連中は「あんなのと一緒にされたくない」とか言っていたしね。

――歴史に「もしも……」はないといいますけど、吉川さんと成忠さん、山崎さん、石田さんが、あそこで反乱を起こして大会に出ると言った場合、それが通ったような気もします。少なくとも、後の怒濤派やL協になる連中、つまりマル戦の三分の二はついていったと思うな。そうすれば、第二次ブント最初の大分裂は、あのような形にはならなかったはずです。

● 本当にもっと考えるべきだった。未熟だったよな。吉川さんも凄く悔いていると思うよ。きっと最大の悔いじゃないかな、私はそう思う。だから、お互い触れたくないし、私は怒濤派で吉川氏とずっと一緒にやるんだけど、そのことで話したことはないんだよ。ただね、関西もよくなかったんだ。吉川も成忠も一緒にやろうぜっていう愛情のある言葉はなかったよ。七回大会直前のころ、あんなに無茶苦茶攻撃されるのって心外だったもの。本当に無茶苦茶だったものな(苦笑)。佐世保だって、関西ブントの新開氏と私とで決めてやったんだよ。それを塩見さんのグループから、成忠、お前が勝手にやったのが悪いってやられた。なんでそんなこと言うんだよって、悲しかったな。現場で一緒に苦労した人間が難癖付けるのならまだいい。でも砂川で「成忠、あとは頼むぞ」って言って、それからいなくなってたやつに、なんで言われなくちゃならないんだ、私はこの一年間死に物狂いで苦労したんだぞって思ったもの。

まあ塩見さんとは最終的に借りもない貸しもないって思っているから、とっくに私は許しているし、きびしく、やさしく付き合っていきたいとは思っているけどね。最後に言っておきたいんだけど、やったことはやったことだから、こういう風に話してもいいけど、歴史的評価とか反省とかとは全然別だということだ。それはまた別の機会に話そう。

(なるしま・ただお　元全学連副委員長)

(聞き手・府川充男)

編集部注　何しろ三十年前後も昔のことと、記憶が定かでない部分が多いので確かめてほしいとの成島忠夫氏のご依頼により、第二次ブント指導部であった数名の方々に事実確認をお願いする手紙を出させていただきました。いくつかのご指摘が寄せられ、それらにしたがって成島氏が記事の一部を削除されたり、書き換えられたりされました(ほとんどは削除で対応)。その過程で判明したことのうち、インタビュー記事には反映させなかったものの、「歴史的証言」として重要と思われる十・八羽田闘争関係のことについて多少コメントを付しておきたいと思います。

①大森海岸駅から高速道路への突入という戦術はマル戦系学対の四人組によって立案された。②成島道官学対部長を通じて政治局にもこの方針は通知され、了承を得ていた。③八日に使用された棍棒は、七日に法大に押しかけるために中大の講堂の長椅子を分解して急遽準備された。準備したのはブントの学対部員たちである。④その棍棒は中大学館に持ち帰られ毛布で梱包しておいた。⑤七日の深夜に中大学館で開かれたブント学対会議で、大森海岸駅からの突入方針と、現地に棍棒を「もっていくこと」を決定した。棍棒を実際に機動隊に対して使用するかどうかは明確に決定せず「暗黙の了解」であった。⑥高速道路突入方針の最終決定は当日朝、成島道官氏が大森海岸駅へ行って状況判断し、氏から中継所に詰めていた山崎順一氏にゴーの連絡が行き、そこから品川で成島忠夫氏、さらに石田寿一氏に指示が流れた。⑦当日、高速道路を左折してしまったのは、機動隊が左へ逃げたので、先頭部分で誰かが「どっちだ?」と聞いたのを機動隊が逃げた方面を訪ねられたと思った者が「左だ」と答えたのを皆が空港の方面と勘違いしてしまったのではないか。

なお本号編集の最終段階で当時の『戦旗』や『前進』を当たっていたところ、成島氏の細かな記憶違いが二三、発見されました(逮捕期日が少しずれていたり、中核派が佐世保の基地に行動隊を突入させたのが一七日ではなく二一日であったこと、文章の用語など)。何しろ日本人の平均寿命の半分ほどの前のことですので(また当時の成島忠夫氏が凄まじい激流の渦中にあったことからしても)無理からぬところと思います。われわれとしては、インタビューの流れからして、これらについてはあえて手直しせず、この三十年という年月の意味を深く噛みしめたいと考えます。

特集・第二次ブント30年　関連年表

【一九五六年】

二・一四　ソ連共産党第二十回大会。フルシチョフがスターリン批判。

一〇・二三　ハンガリー動乱。

【一九五八年】

一二・一〇　共産主義者同盟結成(いわゆる第一次ブント)。

【一九六〇年】

六・一五　全学連、国会構内突入。樺美智子さん死亡。

八・九　共産同全国学生細胞代表者会議。安保闘争の総括めぐり分派闘争始まる。革命の通達派、プロレタリア通信派、戦旗派に三分解。関西地方委や東京の独立系による社学同再建運動始まる。

【一九六二年】

四・　共産同関西地方委を中心に関西共産主義者同盟を結成。

一二・　服部信司、望月彰、矢沢国光(杉本宗一)ら東京社学同のマルクス主義戦線委員会によって『マルクス主義戦線』発刊さる。

【一九六三年】

九・　佐竹茂、今井澄、黒岩卓夫ら東京社学同の一部、高橋良彦(松本礼二・故人)ら電通労研、右田昌人ら青年社など、マルクス・レーニン主義派結成。

一〇・一〇　小松川公会堂で東京社学同第四回大会。社学同三派(マル戦派、ML派、独立派)の分岐明確化。

【一九六四年】

三・　共産同マルクス主義戦線派結成。

【一九六五年】

八・　佐竹氏直系グループを除く東京のML派、独立派と、関西ブント(関西共産主義者同盟)など、共産同統一委員会を結成して連合を完了。

【一九六六年】

三・　ブント・マル戦派第五回大会。「われわれは、共産主義者同盟統一委員会との合同、全国単一共産主義者同盟再建を第一歩として、新たな革命指導部の準備の具体的過程にはいらなければならない。」(『マルクス主義戦線』第十四号、第五回大会論文)

五・　共産主義者同盟統一委員会第二回大会。「同盟は、共産主義者同盟の全国的確立、大ブント構想の一環としてマルクス主義戦線派との統一を推進する。」(報告決定集)。

六・一五　共産同(黎明)・杉本宗一(矢沢)と共産同統一委(先駆)・松本礼二連名の「プロレタリア日本革命の勝利をめざし新たな革命指導部を組織するために―共産主義者同盟統一再建に関する声明」。

九・　一　明大理事会、学費値上げを決定。明大闘争始まる。「共産主義者同盟統一再建準備委員会」(赤崎次郎[山崎衛]・秋本道夫[望月]・飛鳥浩次郎[佐藤]・泉清二[石田]・河合一郎[山崎順一]・北田肇[吉川]・佐伯武[佐野]・仏徳二[右田]・杉村宗一[矢沢]・垂水俊介[中井]・藤井竹明[成島道宮]・正木真一[石井]・松村三郎[浦野]・松本礼二[高橋]・水沢史郎[服部]の連名)による「日本階級闘争の前衛部隊＝共産主義者同盟を先頭に前進を開始せよ」発表。

七　社共共闘による原潜寄港阻止横須賀現地集会。

＊＊　統一派・マル戦派の社学同両派による「社学同統一再建実行委員会」によるアピール「侵略と抑圧に抗し生活と権利を守りぬく戦闘的学生運動を創設せよ！　新たな全学連再建めざし社会主義学生同盟の全国的再建統一に総結集せよ」発表。

＊＊　この月、共産主義者同盟統一再建第六回大会開催＝第二次ブント結成。

一〇・　五　第六回大会政治報告を掲載して第二次ブント機関紙『戦旗』第七十六号発刊。題字脇のスローガンは「反帝闘争をプロレタリア日本革命へ！　日本革命をアジア革命の勝利と日本革命の突破口とせよ！　反帝闘争の旗の下侵略と抑圧に抗し生活と権利を実力防衛せよ！　プロレタリア永続革命の旗の下共産主義者同盟に結集せよ！」。

八―九　明大で全学連再建準備会結成大会開催。準備会委員長斎藤克彦(社学同)、副委員長蒲池裕治(社学同)・高橋幸吉(解放派)、書記長秋山勝行(中核派)。中執は社学同八名、中核派六名、解放派三名、ML派一名。

一一・二四　明大和泉分校、ストライキに突入。

一二・　一　明大神田本校、ストライキに突入。生田・和泉と合わせて全学バリケード・ストライキ。明大二部

三　自治会(学苑会)、社学同の新執行部設立。インターン制完全廃止をめざし東京医歯大、ストライキに突入。順天堂大で開かれた全国大学医学部長・病院長の会議に医学連・青医連が突入して団交。

五　学館管理運営をめぐって中大昼自、緊急自治委員総会でストライキ提案を可決。八日、中大全中闘結成。

九　全学連再建準備会の主催により中大で教育学園闘争勝利全関東学生総決起集会。大阪反戦ほかの共催により中之島公会堂で国際抗議デー大阪集会。地区反戦がはじめて独自の挺団でデモ。

一七―一九　全学連再建大会。三十五大学・七十一自治会・百八十二代議員参加。斎藤委員長、蒲池・高橋副委員長、秋山書記長。

【一九六七年】

一・一七　全学連、砂川に各大学の代表を派遣。

三〇　明大に機動隊導入。体育会・ガードマンが学生活動家に白色テロ。

二・　二　明大学生会中執委員長大内義男と明大武田総長が「二八理事会案」に基づく、いわゆる「二・二協定」に調印。明大闘争、大混乱に。

一一　最初の建国記念日。大阪中電で前日に署名入り声明書を発表した労働者二十六名が強行出勤。東大駒場・本郷、慶應、早大、東工大、京都府学連、和歌山大などで同盟登校。高校生会議(東京)、社高同(関西)を中心として東京・京都・大阪で高校生も同盟登校。

一八　全学連中央執行委員会。斎藤全学連委員長の解任と中執罷免を決議し、新人事を決定。秋山委員長、成島忠夫・蒲池副委員長、高橋書記長。

二六　第一波砂川闘争＝砂川基地拡張阻止現地総決起集会。現地反対同盟に連帯して各地区反戦、全学連など全都動員で結集。

＊＊　この月、第二回中央委員会。明大闘争の総括と反帝闘争の規定をめぐって論争。

四・一〇　社学同明大支部再建。

二八　全学連沖縄第一波闘争、「沖縄米軍基地撤去・砂川基地拡張阻止・ベトナム反戦」を掲げて日比谷野音の総評集会に参加、岩井総評事務局長をヤジる。京都反戦主催のベトナム反戦集会。

五・二〇　東京では高校生会議(社学同系)・反戦高協(中核派系)・高社研(ML系)などによる「砂川基地拡張阻止高校生共闘会議」の高校生集会とデモ。

二五　医学連・青医連、医者懇最終答申案粉砕、医師法・医療法改悪阻止闘争。厚生省前座り込み。

二八　三多摩反戦・都内各地区反戦・全学連ほかの共催による立川基地拡張実力阻止青学総決起集会。全学連は各所で機動隊と激突。

一五　全電通会館で六・一五実行委主催、ブント・社学同後援の安保記念政治集会。発言者は樺美智子母堂の樺光子氏、高橋ブント議長、共労党・内藤知周氏、社労同・中村丈夫氏、長船社研・西村卓司氏、成島全学連副委員長、佐藤ブント副委員長、服部書記長ほか。

七・　九　社共・反戦・反対同盟などの共催による砂川基地拡張阻止闘争。全学連、各ゲートで機動隊と激突。

一二―一四　全学連定期大会。三役人事変わらず。三役

以外の書記局員は久保井拓三(社学同)・前田文雄(社学同)・青木忠(中核派)・渡木繁(解放派)・北村行夫(解放派)・吉羽忠(中核派)。

一五　原潜寄港に対し社学同は緊急動員で横須賀現地闘争。千葉市で三里塚国際空港設置反対集会。反対同盟七百、各地の労働者・農民が参加。

一八　中央反戦(準)の運営委においてブントと中核が衝突。

二三　中央・全国両実行委主催で原潜同時寄港抗議横須賀現地闘争。全学連はゲート前に座り込み。

一五　成田空港設置阻止総決起集会。現地反対同盟千五百名のなかにはヘルメット、竹槍、鋤、馬などで武装した人もあった。全学連五十名参加。

一〇・六　日比谷公園で全学連統一行動。中核派の法大処分闘争に関するブント、社青同解放派批判のビラの内容をきっかけに、解放派の一部全学連書記局員が中核派の丸山全学連書記局員を殴打。

七　中核派全学連書記局員、八日の方針をめぐる打ち合わせのため法大にやってきた高橋幸吉氏ら解放派の全学連書記局員を拉致、長時間のリンチを加える。中大に集まっていた社学同をはじめとする四派は全員、中大講堂の長椅子を解体して作った棍棒で武装して法大に押しかけ、解放派の全学連書記局員を救出。三派全学連はこれ以降、中核対反中核連合に完全に分岐することとなる。

八　佐藤訪ベトナム阻止羽田闘争＝いわゆる「第一次羽田闘争」。中大に泊り込み、日本学生運動史上初めてヘルメット・棍棒で武装した社学同・解放派・ML・第四インターの全学連部隊は早朝、大森海岸駅から高速道路鈴ヶ森ランプに突入、機動隊を粉砕し、この日から数年にわたる激闘の日々を切り開いた。四派の全学連部隊は高速道路から穴守橋へ転戦して、萩中公園から出発した全国反戦部隊と合流。一方、中核派は萩中公園から弁天橋へ、その激闘の渦中で機動隊に京大生・山崎博昭君を殺害された。

一三　全学連中央執行委員会。一〇・七問題に関する中核派の自己批判をうけて全学連中執声明。

一七　日比谷野音で山崎博昭君追悼中央葬。

二〇　立川駅構内でベトナム侵略戦争反対・米軍タンク車輸送拒否国労総決起集会。国労を中心として三多摩労協、三多摩反戦、全学連など参加。

二一　国際反戦統一行動。明治公園で昼(教組、自治労、電通等)・夜(国労、全金、鉄鋼等)の二部にわかれて労働者の大集会。全学連は昼間の集会に参加。中大・明大・立正など社学同の動員が伸暢。

一一・九　水戸巌氏ら文化人五十名により一〇・八救援会発足。

一二　社学同、解放派などの全学連部隊は、二時ころより羽田へ向かう産業道路で機動隊と激突、阻止線を突破し全面的市街戦へ。三時過ぎ、全学連は大鳥居付近で丸太棒を先頭に突撃。一方、労働者は昼より日比谷野音で全国反戦主催の総決起集会から新橋駅へデモ、さらに電車で大田区民広場に結集した反戦部隊は大師橋上で機動隊と対峙。北海道では北大、小樽商大、札学大などの決起集会。

二〇　日比谷野音で革命戦士チェ・ゲバラ追悼式。

一二・七　豊島公会堂で共産主義者同盟大講演集会開催発言者＝高橋ブント議長、成島忠夫全学連副委員長、望月東京地区反戦世話人、中井社学同委員長、大田反戦佐藤代表、中大昼自田村委員長、三里塚反対同盟北原氏、服部ブント書記長、成島道官学対部長、吉川東京都委委員長、芝東海地方委委員長、佐野関西地方委委員長。

一九　砂川基地拡張計画、中止さる。

【一九六八年】

一・一三　中大対理事会団交、全学バリケード・スト突入。

一七　エンタープライズ寄港阻止闘争。全学連佐世保派遣部隊、佐世保・平瀬橋に突入し放水・催涙弾にたえて投石戦。機動隊、三方より全学連を包囲し一方的暴行の限りを尽くす。この「過剰警備」に対して社会党等抗議声明。東京日比谷野音で中央集会とデモ。北海道、福島・仙台・茨城・名古屋でも連日のデモ。

一八　全学連、球場から佐世保橋に向かい機動隊と激突。

一九　全学連、ふたたび佐世保橋へ突入。東京では社学同が霞ヶ関駅から一気に外務省構内に突入。東京医歯大、研修協約要求の全学無期限スト突入。

二〇　東大医学部、登録医制粉砕・研修協約要求の無期限ストライキに突入。

二一　全学連、佐世保橋で機動隊と激突。市民一万余が佐世保橋一帯を埋め尽くす。

二・二〇　北区労連主催で王子野戦病院開設阻止第一波闘争。

二七　王子野戦病院開設阻止第二波闘争。東京地区反戦は柳田公園からデモ。社学同は王子駅構内で武装し機動隊の阻止線へ突入。王子駅前に鈴なりとなっていた市民のなかから自然発生的に猛烈な投石が開始され、機動隊を後退させる。

三・三　東京地区反戦主催で王子野戦病院開設阻止第三波闘争。

七　大阪市立労働会館で共産主義者同盟関西地方委・社学同関西地方委主催の七〇年安保粉砕・野戦・三里塚阻止関西政治集会。

八　王子野戦病院開設阻止第四波闘争。三時ころ社学同、解放派、ML派は武装して板橋駅から米軍キャンプ西門に突入。中核派は王子駅前で機動隊と激突。夕刻から柳田公園で東京護憲主催の全都集会。集会後、東京地区反戦、機動隊の阻止線を正面突破し、正門前に達して大集会。

一〇　全国反戦・全学連などの共催による成田空港設置阻止の第一波全国闘争。社学同、ML派、第四インターは明大から現地入りして公団分室前で機動隊と激突。中核派、解放派も機動隊と激戦。

一一　東大医学部教授会、大量学生処分とともに全館をロックアウト。

一六　中大理事会団交で、学費値上げ白紙撤回。バリケード解除。

二八　反戦・全学連全都動員の王子野戦病院開設阻止闘争。この夜、大量の現地住民がはじめて群衆として対機動隊投石戦を行う。

二九―三〇　ブント第七回大会。議長佐野茂樹。岩田弘の意向を酌んだ服部前書記長らに引きずられ、大会二日目を旧マル戦系欠席。(第二次ブント第一次分裂)

(作成協力・府川充男)